

平成 29 年度文化庁委託事業

平成 29 年度
「伝統工芸用具・原材料に関する調査事業」委託業務
報告書

平成30年3月



目次

I. 調査概要	1
1. 調査の背景と目的	1
2. 調査の内容	1
2-1. 実施方針	1
2-2. 調査内容	2
(1) 調査の実施内容	2
(2) 専門家による委員会の設置	4
3. 調査の体制等	4
3-1. 調査期間	4
3-2. 調査実施体制	4
II. アンケート調査	5
1. 調査概要	5
1-1. 調査方法	5
1-2. 調査対象	5
2. 調査結果	7
2-1. ユーザーに対する調査結果	7
2-2. 生産者に対する調査結果	13
2-3. 販売者に対する調査結果	19
2-4. アンケート調査結果のまとめ	25
(1) アンケート調査結果の要旨	25
(2) 今後の情報提供・活用のあり方の検討に向けて	26
III. 実地調査	27
1. 調査概要	27
2. 実地調査結果の要旨	31
2-1. 利用側	31
2-2. 供給側	40
3. 実地調査の成果(まとめ)	46
4. 抽出された課題等(今後の調査展開に向けて)	49

IV. 情報提供・情報活用のあり方と課題等の検討.....	50
1. 情報提供・活用に対する意向・ニーズ等.....	50
2. 検討課題・問題・留意点等.....	50
V. 本調査から見えてきた今後の検討課題.....	52
1. 対象を拡張した実地調査の継続.....	52
2. 分野等を超えた情報共有・技術交流等の促進.....	52
3. より発展的な情報提供・情報活用の可能性についての検討.....	53
資料編.....	55
ユーザーに対する調査結果(分野別).....	57
(1)陶芸.....	57
(2)染織.....	62
(3)漆芸.....	67
(4)金工.....	72
(5)日本刀.....	77
(6)木竹工.....	82
(7)人形.....	88
(8)手漉き和紙.....	92

I. 調査概要

1. 調査の背景と目的

近年伝統工芸品の需要、生産が低迷する中、伝統工芸品の制作に使用される用具や原材料の需要も大きく後退、供給が途絶えるなど用具・原材料の入手困難が深刻化し、伝統工芸品の制作・生産活動や伝承者養成に支障が出ている。その一方では、海外からの観光客の増加等に伴い我が国の伝統工芸品に対する国内外の評価が高まり、伝統工芸品需要層の裾野も広がりつつあり、伝統工芸品の制作、技術の持続的継承、発信が求められている。そのためには伝統工芸品の制作、人材養成の基礎となる伝統的な用具や原材料の安定的な供給が必要となっており、伝統工芸品の制作に係る関連技術の内容及びその実情を正確に把握することが重要となっている。

本調査事業は、過去の関連調査報告書等から整理する情報に加え、経済産業省、林野庁、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会等の協力を得つつ、伝統工芸用具・原材料等に関する関係各機関等の情報を集約し、これをもとに伝統工芸用具・原材料の利用や供給等に関する実情を調査するとともに、これにより得られた成果の活用方法を検討し、伝統的な工芸技術に関する用具・原材料の持続的な供給に資する保護施策を策定することを目的として実施したものである。

2. 調査の内容

上記の本調査の背景と目的を踏まえ、以下の方針・内容により実施した。

2-1. 実施方針

これまでに実施した伝統工芸品関連調査等の経験を踏まえ、本調査の実施にあたっては次の3点を重視し、伝統工芸用具・原材料に関する情報の追加・更新、充実し、将来的な情報活用方法や用具・原材料の持続的供給に資する保護施策策定のための検討資料をより一層の充実させることに努めた。

- 用具・原材料の持続的確保に向けて伝統工芸の技術的・質的側面に加え、経済的側面の実態把握
- 用具・原材料の供給・利用の実態把握と問題の深堀に向けた供給側と需要側との突き合わせ・比較検討
- 情報共有・発信力強化・交流促進に向けた仕組み・環境づくりを重視した用具・原材料データベースの構築

2-2. 調査内容

(1) 調査の実施内容

1) 調査対象

a) 過去の資料による伝統工芸に関する用具・原材料の概要把握

これまでに実施された文化庁及び経済産業省委託事業による伝統工芸に関する用具・原材料関連調査報告書（平成9年度～20年度の19冊の関連調査報告書、以下「既存調査報告書」）をもとに、次の点を整理した。

- 過去に調査対象となった用具・原材料のリストアップ、整理
- 過去に調査対象となった用具・原材料製造及び販売事業者、ユーザー（工芸家、職人等）のリストアップ、整理
- 各伝統工芸分野における技術・技法と用具・原材料との関係性、必要性の整理
- 用具・原材料の入手方法、購入・入手先、入手の難易度と問題への対応状況
- 用具・原材料製造、販売事業者の推移と事業経営上の課題
- ユーザーの推移と事業概要、事業経営上の課題
- 既存調査で得られた成果及び本調査業務で対応すべき事項、内容の整理

さらに、既存調査報告書等から得られた成果、項目や内容等の過不足を本調査業務目的に照らして検討し、本調査業務において新規・追加的に調査すべき事項・内容を抽出・整理し、アンケート、実地調査することとした。

b) アンケート、実地調査対象の特定

既存調査報告書等に記載された伝統工芸用具・原材料の生産・販売・利用に関係する事業者・工芸家等の抽出に加え、保持団体・保存会、協同組合、日本工芸会等の関連団体、伝統工芸士会、伝統的工芸品産地組合等の関連団体等の各種資料からリストアップした対象について、転廃業や現在の連絡先（住所、電話等）の確認作業を行い、陶芸、染織、漆芸、金工、日本刀¹、木竹工、人形、手漉和紙、その他（ガラス工芸、撥鏤、截金など）の9分野に区分・整理し、調査対象として特定した。

¹ 日本刀関係者のリストアップ数が比較的多くなったことから金工から区分。

2) アンケート調査（伝統工芸用具・原材料の生産・販売・利用実態等の把握）

特定した調査対象に対して、用具・原材料の製造・販売・利用の実態と問題点の把握を目的としたアンケート調査を実施した。上記の既存調査資料等の整理・抽出等をもとに、調査項目並びに回答の便、設問内容・選択肢等を検討し、用具・原材料の生産者、販売者、ユーザーの別に調査票を設計し、特定した調査対象（約 1,500 件）に対して郵送配布・回収を基本に実施した。

回収した回答結果のチェック、電話等による確認・補足等を行い、将来的な情報活用に資する集計・分析を行い、伝統工芸用具・原材料の供給と利用に関する現状把握及び課題・問題点等に対する取組方策等の検討に役立てることとした。

3) 実地調査（伝統工芸用具・原材料の流通、利用等の実態と問題の詳細把握）

上記アンケート調査・分析結果をもとに、用具・原材料の安定的確保上の緊急性、幅広い分野に影響する重要度等を考慮し、実地調査で対象とすべき伝統工芸用の分野と用具・原材料の供給・利用に関する対象者を検討し、対象品目に該当する用具・原材料のユーザーおよび取引のある生産・販売者 10 件程度を実地調査の対象として選定し、現地訪問によるヒアリング調査と電話取材等を組み合わせ、ケーススタディ的に実地調査を実施した。

また、現地訪問に際し、関係する関連事業者、保持団体・保存会や伝統的工芸品産地組合等関係団体、自治体等に対しても併せて取材・関連資料の収集等を行い、アンケート調査結果を踏まえつつ、用具・原材料の供給・利用に関する実情、問題点、問題への対応状況や意向等を具体的に把握し、今後の用具・原材料の持続的な確保に向けて必要な方策等を検討するための資料として整理した。

【調査項目】

- 伝統工芸用具・原材料の生産・販売・利用の実態と問題
- 伝統工芸技術と用具・原材料の関連性と問題
- 用具・原材料の過不足状況、生産・販売・利用上の問題、将来的な見通し
- 情報提供・活用のあり方に関するニーズ・要望、問題
- 問題解決の可能性、問題解決に向けたニーズ・要望

(2) 専門家による委員会の設置

伝統工芸用具・原材料の事情及び伝統工芸との関連に精通している各分野の専門家等を選定し、上記の調査内容・実施成果を踏まえ、現状や課題認識を共有し、将来的な情報活用の有効性やその課題等について計2回議論を行った。

【委員】 (50音順、敬称略、7名)

秋葉 和生	一般社団法人伝統的工芸品産業振興協会 常務理事
石村 智	独立行政法人国立文化財機構 東京国立文化財研究所無形遺産部 音声映像記録研究室 室長
岩関 禎子	一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン 専務理事 兼 事務局長 (※第1回は坂井基樹常務理事が代理出席)
清水 克朗	富山大学 芸術文化学部・大学院 芸術文化学研究科 准教授
清山 健	美濃和紙の里会館長
前田 昭博	公益社団法人日本工芸会 副理事長
室瀬 和美	公益社団法人日本工芸会 副理事長

3. 調査の体制等

3-1. 調査期間

本調査は、平成29年9月から平成30年3月までの期間に実施した。

3-2. 調査実施体制

本調査の実施メンバーは下記のとおり。

千葉 勝	公益財団法人未来工学研究所	研究参与
三重野 覚太郎	〃	主任研究員
野呂 高樹	〃	主任研究員

Ⅱ. アンケート調査

1. 調査概要

1-1. 調査方法

- ・ 郵送による発送・回収
- ・ 調査期間 2017年11月10日～11月27日
(ただし、2017年12月末までの回収分を有効回答として集計)
- ・ 調査票は、ユーザー・生産者・販売者で区分した3種類を作成し、それぞれの対象に郵送

1-2. 調査対象

伝統工芸用具・原材料の生産・販売・利用に関わる1490の個人・団体・事業者等を対象に調査票を発送した。²

調査対象は、経済産業省指定の伝統的工芸品の生産者団体235、日本工芸会会員838、選定保存技術保持団体・保持者26、重要無形文化財保持団体16、日本工芸会に加入していない重要無形文化財保持者4の計45、文化庁および経産省が過去に実施した同趣旨の調査からリストアップした個人・団体が304、そして、日本刀制作関係から68となった。

なお、日本工芸会からは、基本的に全会員を対象としつつ、陶芸部会に限っては会員数が多数のため、分野毎のバランスを考慮し165名を対象として選定した。

また、調査対象者を所属団体や事業者の名称および事業内容等から生産・販売・利用に区分したところ、ユーザー1162、生産者181、販売者147となった(日本工芸会会員はすべて「ユーザー」に区分)。

² 調査対象として1500を選定したが、個人・団体の重複、廃業・解散等を除外した結果1490となった。

表 1 アンケート調査対象の内訳

	発送数	対象区分		
		ユーザー	生産者	販売者
1) 伝統的工芸品産地組合(経済産業省提供)	235	235	—	—
2) 日本工芸会(陶芸部会は 165、その他の部会は全数)	838	838	—	—
3) ①選定保存技術保持団体・保持者(26) ②重要無形文化財保持団体(16) ③日本工芸会に加入していない重要無形文化財保持者(4) (①+②+③) ³	45	21	24	—
4) 既存調査報告書(文化庁、経産省等)からのリストアップ分	304	—	157	147
5) 追加分(日本刀関係)	68	68	—	—
計	1490	1162	181	147

³ 団体解散のため1減。

2. 調査結果

上記の方法によるアンケート調査の結果、調査期間内にユーザー407、生産者46、販売者26、計479の個人・団体等から回答を得た。

発送数1490に対する回収率は32.1%となった。対象カテゴリー毎の回収率は、ユーザー35.0%、生産者25.4%、販売者17.7%となった。

以下の調査結果を観る上ではユーザーに比べて生産者、販売者の回答数が限られる点に留意する必要がある。

2-1. ユーザーに対する調査結果

1) 回答者の分野別比率

日本工芸会の分野に準じ、回答したユーザーの活動分野を分類した結果は次の通り。なお、「日本刀」は比較的多数のため金工から区分している。

表 2 回答者の分野別比率

		構成比	回答数
1	陶芸	14.7%	60
2	染織	14.0%	57
3	漆芸	15.5%	63
4	金工	12.8%	52
5	日本刀 ⁴	9.1%	37
6	木竹工	16.0%	65
7	人形	3.2%	13
8	手漉和紙	4.9%	20
9	その他	9.3%	38
	不明	0.05%	2
	計	100.0%	407

2) 代表者の年齢

ユーザーの代表者（個人は当人）の平均年齢は65.0歳、最高齢は金工の91歳、最年少は木竹工の33歳であった。

表 3 代表者の年齢

代表者の平均年齢	65.0歳	回答数:351	—
代表者の最高齢(分野)	91歳(金工)	代表者の最低齢(分野)	33歳(木竹工)

⁴ 回答多数のため「金工」から区分して整理。

3) 専業・兼業の状況

ユーザーのうち、専業であるとの回答が87.9%と、専ら伝統工芸品の制作活動に携わっているというユーザーが回答者の多数を占めた。ただし、指定要件に基づく伝統工芸だけではなく、その技術や材料等を生かした派生的な商品等を製造・制作している人も少なくないと言われており、厳密な意味での伝統工芸品制作のみの専業ではない場合が含まれるものと考えられる。

表 4 専業・兼業の状況

		構成比	回答数
1	専業	87.9%	304
2	兼業	12.1%	42
	計	100.0%	346

4) 従事者数

ユーザーの半数超の54.0%が従事者は1人（本人のみ）と回答した。従事者3人までを合わせると8割近い78.0%を占め、1事業者あたりの平均従事者数は3.9人となっている。個人ないし比較的小規模のユーザーが多数を占めている状況が見て取れる。

表 5 従業者数（経営規模）

		構成比	回答数
1	1人	54.0%	143
2	2人	15.4%	41
3	3人	8.6%	23
4	4人	4.1%	11
5	5～9人	8.6%	23
6	10～19人	4.9%	13
7	20人以上	4.1%	11
	計	100.0%	265
	1事業者あたりの平均従事者数	3.9(人)	—

※単独事業体の代表者を含む従事者数（組合等の構成員数は対象外）。

5) 後継者の状況

後継者がいるというユーザーは36.1%にとどまり、ほぼ3分の2の63.9%が後継者無しという状況である。

後継者がいるという場合の後継者の平均年齢は38.0歳で、前述の代表者の平均年齢65.0歳に対して27.0歳、おおよそ一世代の年齢差となっている。

表 6 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	36.1%	129
2	後継者無し	63.9%	228
	計	100.0%	357
	後継者の平均年齢	38.0歳	106

6) 使用している用具・原材料の主な購入方法

現在使用している用具・原材料の購入先を尋ねたところ、「生産者から直接購入」が52.4%、「卸・問屋」が52.1%と半数を超え、次いで「小売業者（ギャラリー・量販店含む）」が45.8%と、半数前後の人がこの3つのルートの内いずれかあるいは併用で購入している。半数超のユーザーが販売業者を通さず生産者と直接つながって、必要なものを確保している状況が窺える。なお、「その他」は同業者（師事した人を含む）や異業種などが挙げられている。

表 7 使用している用具・原材料の主な購入方法（複数回答）

		構成比	回答数
1	卸・問屋	52.1%	175
2	小売業者(ギャラリー・量販店含む)	45.8%	154
3	生産者から直接購入	52.4%	176
4	ネット販売	11.3%	38
5	その他	11.3%	38
	計	100.0%	336

7) 回答内容の活用について（文化庁のデータベースへの掲載等を踏まえて）

今回回答した内容について、今後文化庁で構築していく予定のデータベースへの掲載・活用への可否・意向を尋ねたところ、ほぼ4人のうち3人が「可」と回答し、情報提供・共有の仕組みをつくるという趣旨に対する理解や期待感が窺える。他方で、自らの事はよいが、回答した購入先など他者の情報については慎重な扱いを求めるといった回答も多々あり、情報の信頼性（正確性）の確保も含め、検討課題の一つとなりそうである。

表 8 回答内容の活用について（文化庁のデータベースへの掲載等）

		構成比	回答数
1	可	74.3%	272
2	不可	3.8%	14
3	今はどちらともいえない	21.9%	80
	計	100.0%	366

8) 用具・原材料について、入手しやすい状況か（回答のあった品目毎）

現在使用している用具・原材料のうち63.3%の品目が既に「入手しにくい（難しくなっている）」と回答している。入手しにくい品目は「日本産漆」、「駿河炭（研磨炭）」、「蒔絵筆（動物毛）」などが目立ち、生産者の高齢化等による廃業、資源の減少・枯渇が理由・背景として挙げられている。

表 9 用具・原材料の入手しやすさ

		構成比	回答数
1	入手しやすい	36.7%	286
2	入手しにくい(難しくなっている)	63.3%	494
	計	100.0%	780

※使用している複数の用具・原材料について品目毎に回答を得ている。

9) 使用している用具・原材料について、どのくらいの期間の使用量を確保できているか（用具の場合は耐用年数等）（回答のあった品目毎）

使用している品目について、必要な量の「5年以上」確保しているという回答が24.8%など、比較的長い期間必要な量を確保している状況が窺える。しかし、入手できる限りの量を買いだめしているといった回答も目立ち、必ずしも良好な需給状況が表れているとは言えないと思われる点に注意が必要である。

表 10 どのくらいの期間の使用量を確保できているか（用具の場合は耐用年数等）

		構成比	回答数
1	半年未満	12.2%	61
2	1年未満	21.4%	107
3	3年未満	25.1%	125
4	5年未満	16.4%	82
5	5年以上	24.8%	124
	計	100.0%	499

**10) 使用している用具・原材料について、今後どのように変わると見込まれるか
（回答のあった品目毎）**

用具・原材料の入手先は今後どのように変わると見込まれるか尋ねたところ、「減る」「将来なくなる可能性がある」「既に無くなることが決まっている」を合わせると7割を超え、使用している品目のうち6.8%が「既に無くなることが決まっている」と回答している。理由・背景として、生産者の廃業、産地の供給制限、伐採・採掘の禁止などが挙げられており、駿河炭（研磨炭）、陶土陶石、一部の天然木などその影響が既に出ている品目もある。「将来なくなる可能性がある」を合わせると4割近い品目が今後入手できなくなる可能性があるという結果となっている。

表 11 用具・原材料の入手先は今後どのように変わると見込まれるか

		構成比	回答数
1	あまり変わらない	27.1%	204
2	減る	33.5%	252
3	将来なくなる可能性がある	32.6%	245
4	既に無くなることが決まっている	6.8%	51
	計	100.0%	752

**11) 使用している用具・原材料の入手・確保について、問題・課題になっている事など
（回答のあった品目毎、複数回答）**

使用している品目の入手・確保について、「入手先の後継者難・人材難等」が最も多く52.0%、次いで「入手先の転廃業、生産中止等」44.2%、「新たな入手先の開拓が困難」35.5%などが問題・課題になっている。供給量の減少や品質低下などではなく、入手先自体がなくなるという状況が使用品目の半分程度にあるという結果となっている。

表 12 用具・原材料の入手・確保について、問題・課題になっている事など

		構成比	回答数
1	入手先の転廃業、生産中止等	44.2%	280
2	入手先の後継者難・人材難等	52.0%	329
3	入手先の技術・品質の低下	22.4%	142
4	材料不足等による仕入先の生産低下	21.0%	133
5	代替品・輸入品等への置き換わり	16.7%	106
6	仕入れ減少(少量調達)に伴う入手コスト増	25.4%	161
7	新たな入手先の開拓が困難	35.5%	225
8	上記以外	6.6%	42
	計	100.0%	633

1 2) 問題等への対策等をとっているか (回答のあった品目毎)

上記の使用している品目の入手・確保の問題・課題となっている事に対して7割近くのユーザーは「対策等はとれていない」と回答しており、「対策をとっている」のは31.9%にとどまっている。一部では、生産側の人材育成への協力や植樹といった組織的連携による取組も見られるが、多くはまとめ買い、別業者からの購入など個別対処療法的なものが目立つ。

表 13 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	対策(主な回答)
1	対策等をとっている	31.9%	191	<ul style="list-style-type: none"> ・(陶土)未使用土を研究、切削した磁器土を再生利用 ・(木灰)自ら製造、代替品を試用 ・(竹箴)研究会で組織的に自製 ・(絹糸)販売業者との情報交換 ・(青苧の績み糸)後継者育成の講習会を開催 ・(漆、木炭)原木の植樹 ・(木工)県研究所と適材の研究 ・(筆・刷毛)代替の人工毛を試用、異業種へ製品開発依頼・試作品テストへの協力 ・(砥石)人工砥石、耐水ペーパーを使用 ・(和紙原料)自家栽培、生産地の農家との連携 ・(竹箴)産地で後継者を育成 など
2	対策等はとれていない	68.1%	407	—
	計	100.0%	598	—

2-2. 生産者に対する調査結果

1) 回答者の分野別比率

回答を得た用具・原材料の生産者の分野を分類した結果は次の通り、「染織」、「漆芸」、「金工」の3分野で6割近くになった。ただし用具・原材料はいくつもの分野で使われるものも少なくないため、この分類は主に供給している分野ということである。

「人形」は分類としては回答無しとなったが、生産している用具・原材料としては、「手漉和紙」をはじめ他の分野と共通する品目も少なくない。

表 14 回答者の分野別比率

		構成比	回答数
1	陶芸	4.5%	2
2	染織	20.5%	9
3	漆芸	18.2%	8
4	金工	20.5%	9
5	日本刀 ⁵	6.8%	3
6	木竹工	4.5%	2
7	人形	—	—
8	手漉和紙	11.4%	5
9	その他	11.4%	5
	不明	—	—
	計	100.0%	44

2) 代表者の年齢

生産者の代表者（個人は当人）の平均年齢 67.8 歳、最高齢は手漉和紙の分野に供給している 88 歳、最年少は木竹工の分野に供給している 27 歳となっている。最高齢、代表者の平均年齢ともにユーザーと比べてやや高く、懸念されている生産者の高齢化による減少或いは廃業という状況の一端が垣間見られる。

表 15 代表者の年齢

代表者の平均年齢	67.8 歳	回答数:39	—
代表者の最高齢 (供給している分野)	88 歳 (手漉和紙)	代表者の最低齢 (供給している分野)	27 歳 (木竹工)

⁵ 回答多数であったユーザーに合わせて「金工」から区分。

3) 専業・兼業の状況

用具・原材料の生産者のうち、「専業」という回答が77.1%と、専業割合は高いものの、ユーザーの専業比率に比べるとやや低い。繊維や木材などのように一般の工業製品向けにも生産されているものや稲藁のように副産物として生成されるものなど、伝統工芸品以外に使用されるものも含まれることが表れているものと思われる。

表 16 専業・兼業の状況

		構成比	回答数
1	専業	77.1%	27
2	兼業	22.9%	8
	計	100.0%	35

4) 従事者数

生産者の3割近くが従事者は1人（本人のみ）と回答し、3人までの規模が半数を超える。その一方で、従事者が10人を超えるような事業者の割合も比較的高く、個人から比較的規模の大きな企業組織まで幅がある。

表 17 従事者数

		構成比	回答数
1	1人	29.4%	10
2	2人	14.7%	5
3	3人	5.9%	2
4	4人	8.8%	3
5	5～9人	11.8%	4
6	10～19人	14.7%	5
7	20人以上	14.7%	5
	計	100.0%	34
	1事業者あたりの平均従事者数	18.4(人)	—

※単独事業体の代表者を含む従事者数(組合等の構成員数は対象外)。

5) 後継者の状況

後継者がいるという生産者は6割を超え、後継者有りが少数派のユーザーとは逆の状況となっている。生産者の高齢化による減少が心配されているが、後継者がいる割合は比較的高い結果となった。後継者の平均年齢は40.1歳で、代表者の平均67.8歳からするとだいたいひと回り下の次の世代が控えているといえる年齢層になっている。

表 18 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	60.5%	23
2	後継者無し	39.5%	15
	計	100.0%	38
	後継者の平均年齢	40.1 歳	17

※後継者の年齢が明記された回答の平均。

6) 生産している用具・原材料の主な販売方法・販路

生産している用具・原材料の販売先は「工芸家への直販」が66.7%で最も多く、半数以上のユーザーが直接生産者から購入しているという回答と整合、これを裏付ける結果となっている。次いで「卸・問屋」が44.4%で、依然として主要な販路の一つとなっているといえる。他方、ネット販売は1割少々（回答数4）にとどまり、現状ではそれほど活用されていない。

表 19 生産している用具・原材料の主な販売方法・販路（複数回答）

		構成比	回答数
1	卸・問屋	44.4%	16
2	小売業者(ギャラリー・量販店含む)	41.7%	15
3	工芸家等への直販	66.7%	24
4	ネット販売	11.1%	4
5	その他	19.4%	7
	計	100.0%	36

7) 回答内容の活用について（文化庁のデータベースへの掲載等を踏まえて）

今回の回答内容のデータベース掲載を通じた活用について尋ねたところ、64.9%とほぼ3人のうち2人が「可」と回答した。これはユーザーより10%ほど低く、「不可」が21.6%と、ユーザーよりやや否定的な傾向となっている。

表 20 回答内容の活用について（文化庁のデータベースへの掲載等を踏まえて）

		構成比	回答数
1	可	64.9%	24
2	不可	21.6%	8
3	今はどちらともいえない	13.5%	5
	計	100.0%	37

8) （自らの）用具・原材料の生産量は10年前と比べてどのように変わっているか（回答のあった品目毎）

自らの生産量が「減っている」という回答が半数超の55.6%となり、全体的には減少傾向にあることが表れている。「あまり変わらない」という回答は染料、刷毛、繊維、木炭などで見られるが、必ずしも分野による明確な傾向はなく、個々の生産者の状況が表れているように見える。

表 21 自らの生産量の10年前との比較（回答のあった品目毎）

		構成比	回答数
1	増えている	5.6%	3
2	あまり変わらない	38.9%	21
3	減っている	55.6%	30
	計	100.0%	54

9) 用具・原材料の供給先（販売先・工芸家等）の数は、今後どのように変わると見込まれるか（回答のあった品目毎）

用具・原材料の品目毎に、供給先（販売先）が今後どのように変わる見込みか尋ねたところ、「減る」という品目が51.9%と半数を超える結果となった。さらに、「将来なくなる可能性がある」は5.8%（回答数3）となった。そのうち2件が和紙の製造・卸、1件が漆の小売となっている。

表 22 今後の用具・原材料の供給先の数（回答のあった品目毎）

		構成比	回答数
1	あまり変わらない	42.3%	22
2	減る	51.9%	27
3	将来なくなる可能性がある	5.8%	3
4	既に無くなるが決まっている	—	—
	計	100.0%	52

10) 用具・原材料の生産・供給を今後も続けていく上での問題・課題など

（回答のあった品目毎、複数回答）

用具・原材料の生産・供給を今後も続けていく上での問題・課題の一番は「後継者難・人材難、技術継承等」で71.2%、これに、「需要の減少」59.6%、「生産に必要な材料の不足」51.9%の3つが半数を超える生産者にとっての問題・課題となっている。「上記以外」は陶石・粘土や原料植物の採取制限、絹糸類の確保難などとなり「生産に必要な材料の不足」と同質の問題とみることができる。

表 23 用具・原材料の生産・供給を続けていく上での問題・課題など

（回答のあった品目毎、複数回答）

		構成比	回答数
1	後継者難・人材難、技術継承等	71.2%	37
2	生産に必要な材料の不足	51.9%	27
3	生産に必要な道具・機器等の確保	28.8%	15
4	代替品・輸入品等との競合	17.3%	9
5	需要の減少	59.6%	31
6	供給先の転廃業・移転等による取引の減少	21.2%	11
7	上記以外	9.6%	5
	計	100.0%	52

1 1) 問題等への対策等をとっているか (回答のあった品目毎)

生産・供給を今後も続けていく上で問題になっていること等については、半数超の54.2%が「対策等をとっている」と回答しており、その中身としては、公的な支援や他団体と連携した体制による人材育成に関する取組が比較的多くなっている。逆に「対策等はとれていない」という回答は、原材料の採取制限や確保難に関する問題が目立っている。

表 24 問題等への対策等をとっているか (回答のあった品目毎)

		構成比	回答数	対策(主な回答)
1	対策等をとっている	54.2%	26	<ul style="list-style-type: none"> ・(生糸、麻、漆、金箔など)後継者育成 ・(紬)自家生産 ・(染料、織機用具類など)技術者育成 ・(研磨炭)原木の調査支援、炭焼き体験・研修、植樹 <p style="text-align: right;">など</p>
2	対策等はとれていない	45.8%	22	—
	計	100.0%	48	—

2-3. 販売者に対する調査結果

1) 回答者の分野別比率

用具・原材料の販売者の分野を分類した結果は次の通りで、「染織」、「漆芸」からの回答が比較的まとまった数になったが、「日本刀」、「人形」は回答が得られなかった。「その他」は木蠟の製造販売である。なお、この分野は生産者の場合と同様に、主に取り扱っている用具・原材料の用途などに基づく回答の分類であり、中には幅広い品目を取り扱っている販売者もあることに留意する必要がある。

表 25 回答者の分野別比率

		構成比	回答数
1	陶芸	7.7%	2
2	染織	46.2%	12
3	漆芸	26.9%	7
4	金工	7.7%	2
5	日本刀 ⁶	—	—
6	木竹工	3.8%	1
7	人形	—	—
8	手漉和紙	3.8%	1
9	その他	3.8%	1
	不明	—	—
	計	100.0%	26

2) 代表者の年齢

販売者の代表者（個人は当人）の平均年齢は68.4歳、最高齢は木竹工の92歳、最年少は染織（染料販売）の45歳であった。代表者の年齢層はユーザーさらには生産者よりやや高く、最も高齢化していると言える結果となっている。

表 26 代表者の年齢

代表者の平均年齢	68.4 歳	回答数:22	—
代表者の最高齢(分野)	92 歳 (木竹工(竹材販売))	代表者の最低齢 (分野)	45 歳 (染織(染料販売))

⁶ 回答多数であったユーザーに合わせて「金工」から区分。

3) 専業・兼業の状況

販売者のうち専ら伝統工芸用の用具・原材料を販売している「専業」との回答が71.4%で、専業の割合はユーザー、生産者と比べてやや低くなっている。

表 27 専業・兼業の状況

		構成比	回答数
1	専業	71.4%	15
2	兼業	28.6%	6
	計	100.0%	21

4) 従事者数

販売者の従事者数は1人（本人のみ）が22.7%とユーザーや生産者より少ないが、20人以上の規模まで比較的偏りなく分散している。

表 28 従事者数

		構成比	回答数
1	1人	22.7%	5
2	2人	18.2%	4
3	3人	9.1%	2
4	4人	9.1%	2
5	5～9人	22.7%	5
6	10～19人	13.6%	3
7	20人以上	4.5%	1
	計	100.0%	22
	1事業者あたりの平均従事者数	6.9(人)	—

※単独事業体の代表者を含む従事者数(組合等の構成員数は対象外)。

5) 後継者の状況

「後継者有り」という販売者は35.0%、ほぼ3分の2の65.0%が「後継者無し」となっている。後継者の平均年齢は42.3歳で、ユーザーや生産者よりもさらに高く、最も高齢化している状況が表れている。

表 29 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	35.0%	7
2	後継者無し	65.0%	13
	計	100.0%	20
	後継者の平均年齢	42.3 歳	6

※年齢明記の回答の平均。

6) 用具・原材料の主な販売方法・販路

用具・原材料の販売先で最も多くなったのは「小売業者」の 68.2%、次いで「卸・問屋」の 63.6%で、「工芸家等への直販」の 50.0%より従来流通を担ってきた業者への販売割合が多くなっている。また、「ネット販売」が 36.4%とユーザーや生産者の 1 割少々という割合に比べて高くなっている。

表 30 用具・原材料の主な販売方法・販路（複数回答）

		構成比	回答数
1	卸・問屋	63.6%	14
2	小売業者(ギャラリー・量販店含む)	68.2%	15
3	工芸家等への直販	50.0%	11
4	ネット販売	36.4%	8
5	その他	9.1%	2
	計	100.0%	22

7) 回答内容の活用について（文化庁のデータベースへの掲載等を踏まえて）

今回の回答内容のデータベース掲載を通じた活用について尋ねたところ、4分の3を超える 76.2%が「可」と回答、「不可」は1人のみであった。ユーザーと同じく肯定的な割合が比較的高い結果となった。

表 31 回答内容の活用について（文化庁のデータベースへの掲載等を踏まえて）

		構成比	回答数
1	可	76.2%	16
2	不可	4.8%	1
3	今はどちらともいえない	19.0%	4
	計	100.0%	21

8) 主な取り扱い品目の販売量は10年前と比べてどのように変わっているか

(回答のあった品目毎)

主な取扱品目の73.8%が10年前と比べ販売減と回答しており、減少傾向にある品目が目立っている。回答者の分野の偏りが反映している結果ではあるが、漆、金銀粉、和紙原料、繭・絹糸、筆などの品目で減っている状況が見られる。

表 32 主な取り扱い品目の販売量は10年前と比べてどのように変わっているか

(回答のあった品目毎)

		構成比	回答数
1	増えている	7.1%	3
2	あまり変わらない	19.0%	8
3	減っている	73.8%	31
	計	100.0%	42

9) 用具・原材料の仕入れについて、需要に応じられる数量は確保できているか

(回答のあった品目毎)

主な取扱品の7割以上が販売減という中で、需要に応じられる数量を「確保できている」という回答が61.0%となった。一方、「不足している」、「仕入れ困難になっている」という回答が合わせて39.0%あり、やや分かれる結果となった。「仕入れ困難になっている」という品目は、漆、蒔絵筆、貝、和紙原料などが挙げられている。

表 33 用具・原材料の仕入れについて、需要に応じられる数量は確保できているか

(回答のあった品目毎)

		構成比	回答数
1	確保できている	61.0%	25
2	不足している	12.2%	5
3	仕入れ困難になっている	26.8%	11
	計	100.0%	41

10) 「不足」「仕入れ困難」という品目について、どのくらいの在庫量を確保できているか (回答のあった品目毎)

不足、仕入れ困難という品目についての在庫状況を尋ねたところ、半数の50.0%が「1年未満」、それ以下の「半年未満」「3カ月未満」を含めると合わせて70%超となっている。「3年以上」という回答は無く、仕入れ困難という品目もある中でも、販売という業態の特性上、リスクにもなりかねない長期の在庫は持たない事情が窺える。

表 34 「不足」「仕入れ困難」な品目の在庫量確保（回答のあった品目毎）

		構成比	回答数
1	3カ月未満	14.3%	2
2	半年未満	7.1%	1
3	1年未満	50.0%	7
4	3年未満	28.6%	4
5	3年以上	—	—
	計	100.0%	14

1 1) 用具・原材料の仕入れ先は今後どのように変わると見込まれるか
（回答のあった品目毎）

「不足」、「仕入れ困難」という品目のうち、「将来なくなる可能性がある」が23.1%、「既に無くなることが決まっている」の2.6%（回答数1）を合わせると4割近い品目が今後入手できなくなる可能性があるという結果となった。生産者の高齢化等による廃業、産地の供給制限、伐採・採掘の禁止などの影響が窺える。「既に無くなることが決まっている」という品目は漆漉紙となっている。

表 35 用具・原材料の仕入れ先は今後どのように変わると見込まれるか
（回答のあった品目毎）

		構成比	回答数
1	あまり変わらない	17.9%	7
2	減る	56.4%	22
3	将来なくなる可能性がある	23.1%	9
4	既に無くなることが決まっている	2.6%	1
	計	100.0%	39

1 2) 用具・原材料の仕入れ・販売を続けていく上での問題・課題など

今後も仕入れ・販売を続けていく上での問題等としては、「仕入れ・販売額の減少」が最も多く59.5%、次いで「仕入れ先の後継者難・人材難等」が54.1%とこれら2つが半数を超えている。仕入れ側（生産者など供給元）の後継者難等による減少以上に、自らの取り扱い額の減少を問題視している状況が表れている。

表 36 用具・原材料の仕入れ・販売を続けていく上での問題・課題など
(回答のあった品目毎、複数回答)

		構成比	回答数
1	仕入れ先の転廃業、生産中止等	32.4%	12
2	仕入れ先の後継者難・人材難等	54.1%	20
3	仕入れ先の技術・品質の低下	10.8%	4
4	材料不足等による仕入れ先の生産低下	29.7%	11
5	代替品・輸入品等への置き換わり	27.0%	10
6	新たな仕入れの開拓・確保	24.3%	9
7	仕入れ・販売額の減少	59.5%	22
8	上記以外	5.4%	2
	計	100.0%	37

13) 問題等への対策等をとっているか (回答のあった品目毎)

上記の問題等に対しては、85.3%が「対策等はとれていない」と回答しており、ユーザーや生産者より高い割合となっている。一方、「対策をとっている」のは14.7%にとどまっているが、内容は新たな供給先の開拓、原木の植樹などで、入手難になる品目を確保するための個別対処療法的な対策が目立っている。

表 37 問題等への対策等をとっているか (回答のあった品目毎)

		構成比	回答数	対策(主な回答)
1	対策等をとっている	14.7%	5	<ul style="list-style-type: none"> ・(陶芸用筆)新たな仕入れ先の開拓、輸入品の確保 ・(漆)若い後継者の育成、新たな生産・供給者・仕入れ先の確保 ・(漆漉紙)代用品(レーヨン)への転換 ・(竹)良質な竹林の確保 ・(木蠟)櫃の木の植樹 <p style="text-align: right;">など</p>
2	対策等はとれていない	85.3%	29	—
	計	100.0%	34	—

2-4. アンケート調査結果のまとめ

(1) アンケート調査結果の要旨

伝統工芸用具・原材料の生産・販売・利用の各側面からアンケート結果の要点を整理すると、次のようなことが言える。

①需要減退と生産・販売の縮小・継続困難な状況

伝統工芸のほとんどの分野において関係する多くの用具・原材料について入手難或いは入手先の減少・途絶、生産・販売側では需要減退に伴う生産・販売活動の縮小・撤退、従事者の高齢化・後継者難等による廃業など事業継続が困難な状況等がみられる。

②入手困難な状況の拡大・進行

需要や供給の減少、高齢化等により用具・原材料の入手が困難な状況が様々な分野・品目・産地に拡がり、十数年前の調査時よりも（既存調査報告書と比較して）、その状況がさらに進んでいることが窺われる。

③多くの品目で近い将来入手不能な状況に

伝統工芸のどの分野も程度の差はあれ同じような状況にあり、品目別では既に一部で生産者の廃業等による供給途絶・入手不能な状況が生じている。今後はさらに従事者の高齢化や需要減退傾向などから、多くの品目で減少或いは近い将来なくなるといふ回答が目立っている。

④分野・業種業態等を超えた動きに拡がっていない

既に生産者の廃業などで供給が途絶えた品目について、一部でユーザーによる新規調達先の開拓や代替品の試行・研究、原木の植樹や生産側の人材育成への協力といった取組がみられ、方々手を尽くしているという例もみられるが、組織的或いは分野・業種業態等を超えて連携するような動きは限定的で拡がっていない。

⑤個人レベルでの対応は難しく持続的解決にならず

入手困難な状況や選択の余地のない原材料の品質面の問題等に直面しているユーザーは少なくないが、個人レベルでの対応は難しく、ほとんどの場合有効な対策はとれていない。対応しているとしても入手できる限りで確保しているといった対症療法的な目先の対応が多く、持続的解決に結び付くような取組にはなっていない。

(2) 今後の情報提供・活用のあり方の検討に向けて

①得られた情報活用など効果的な施策展開

今回のアンケート結果を踏まえ、関連情報の提供・活用を含む実質的・効果的な施策を展開していくことが求められる。また、アンケート結果が示すとりわけ切迫した状況にある用具・原材料については、関連情報の提供等を通じて、広く生産・販売・利用等の各当事者による問題解決への自発的・能動的な関与・行動を促し、国や行政による文化財保護施策の積極的な活用につなげることも課題となる。

②分野を超えた共有・つながりによる取組の可能性

今回の調査結果では、工芸家等が個々のレベルでの対策等に限界を感じ、国や行政への対応を要望する声もあった。しかし、個人レベルでは難しくとも同じ問題・ニーズを抱えた個人が集まり、組織的・協力的に分野を超えて互いに情報や知恵を出し合い、対応策を考えるなど、情報の共有やつながり・集合の智慧による可能性については未知数である。今回のアンケート結果を活かし、持続的かつ安定的な伝統工芸用具・原材料の確保に結び付けていくために、その可能性、ポテンシャルを探ることも必要となろう。

Ⅲ. 実地調査

1. 調査概要

1) 調査の目的

実地調査は、アンケート調査の回答内容をもとに主として次の3点を目的に実施した。

- ①伝統工芸用具・原材料の生産・販売、利用の実情・問題点等の詳細把握（アンケート回答内容の補完及び深化）
- ②伝統工芸用具・原材料のユーザー（工芸家等）及び供給者（生産、販売）における情報の共有やつながりの可能性の把握
- ③伝統工芸用具・原材料に関する情報活用・情報公開に対するユーザー・供給者等の意向・ニーズ等の把握

2) 調査の対象

アンケート調査結果を踏まえ、「入手し難い」や「事業の継承が困難」等の状況が顕著に見られ、かつ、分野、業種を超えて広く影響が及ぶことが想定される伝統工芸用具・原材料をパイロット調査の対象として取り上げることが望ましいと考え、次の品目・分野を対象に実施した。

<対象品目・分野>

伝統工芸用具・原材料の中で「入手し難い」や「事業の継承が困難」等の要因が「樹木の減少」や「原木の質の低下」等を共通に指摘され、陶磁器・染織、漆芸・金工等の多くの分野で広く利用されている次の2品目を対象にパイロット調査を実施した。

対象とした原材料	対象となる関連分野
①木灰	陶磁器、染織など
②木炭（研磨炭・燃料炭）	漆芸、金工など

<調査対象者>

対象とした木灰・木炭2品目の生産者及びそのユーザーを主にアンケート回答者から取り上げ、広範かつ比較的高度な技術、知見・情報等を有していると考えられる次の10者を選定し、パイロット調査を実施した。

— 供給者 —

<生産・製造業者、関係団体>

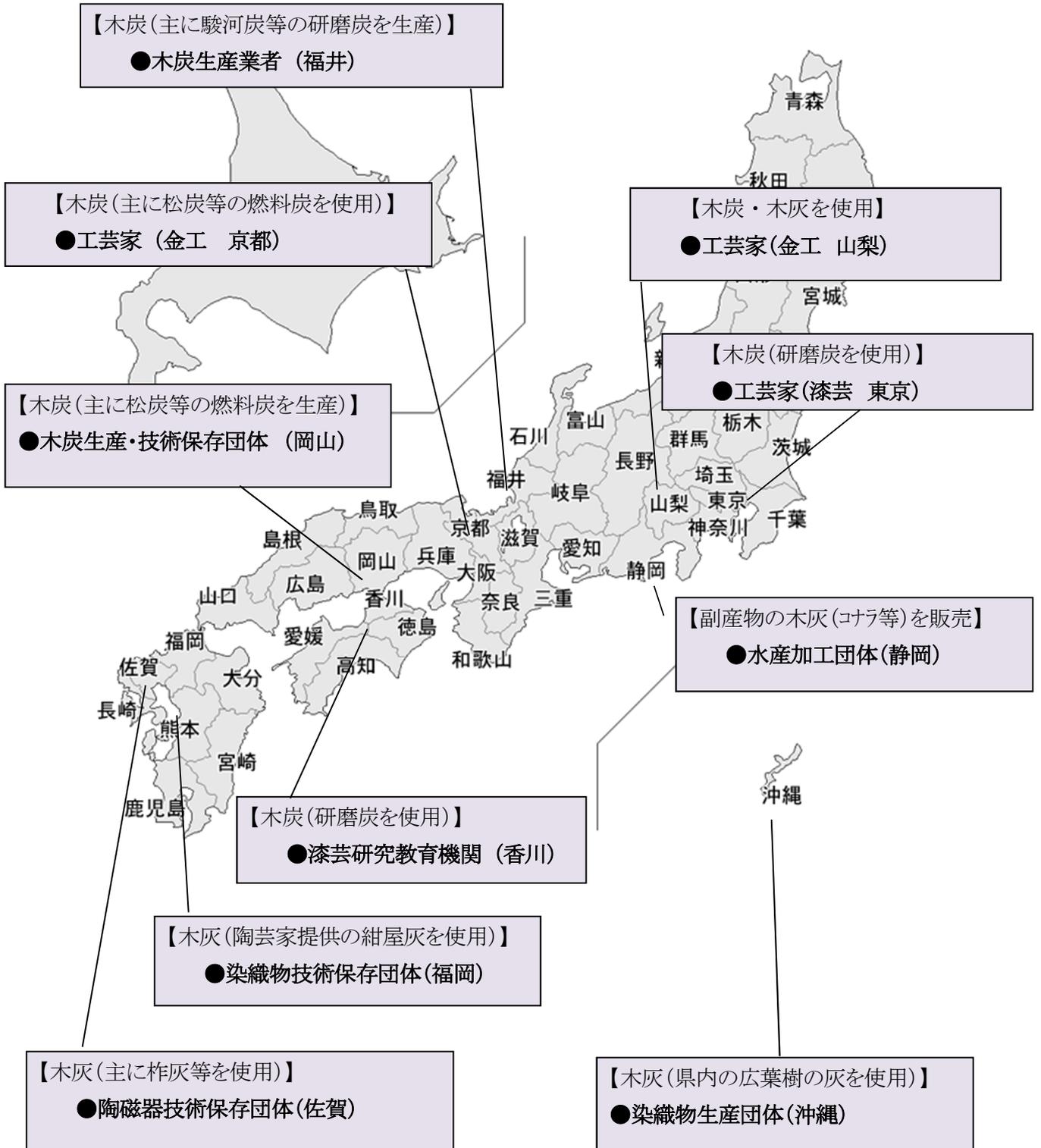
- ①水産加工団体（木灰の生産販売 静岡県）
- ②木炭生産・技術保存団体（松炭等の木炭生産販売 岡山県）
- ③木炭生産業者（研磨炭等の木炭生産販売 福井県）

— ユーザー —

<工芸家、関係団体>

- ④染織物技術保持団体（織物、木灰の利用 福岡県）
- ⑤陶磁器技術保存団体（陶磁器、木灰の利用 佐賀県）
- ⑥漆芸研究教育機関（漆芸、研磨炭の利用 香川県）
- ⑦工芸家（金工、松炭・研磨炭の利用 京都府）
- ⑧染織物生産団体（織物、木灰の利用 沖縄県）
- ⑨工芸家（漆芸、研磨炭の利用 東京都）
- ⑩工芸家（金工、松炭・研磨炭の利用 山梨県）

実地調査対象者の所在地域



3) 調査の方法

実地調査は、原則対象者の現地を訪問し、次の調査項目を中心に、2時間前後で生産及び利用現場の見学及び面談による聞き取りによる方法で実施した（一部の対象者については、相手方の事情・意向により電話による聞き取り方法で実施）。

<ヒアリング調査項目>

— 供給側 —

- ①アンケート回答内容の補完、掘り下げ（生産状況と問題点、対応状況など）
- ②自らの生産・販売の状況
- ③課題・問題等への対応・取組状況・見通し
- ④業界・産地等の状況・動向と今後の見通し
- ⑤情報収集等に関する取組状況
- ⑥今後の情報提供・活用に対する意向・問題点
- ⑦データベースに求める要件や機能、利用可能性
- ⑧異分野・ユーザー等との交流・連携等に対する意向 など

— 利用側 —

- ①アンケート回答内容の補完、掘り下げ（入手状況と問題点、対応状況など）
- ②入手困難な用具・原材料と伝統工芸品の技術等との関係とその影響
- ③入手困難な場合の伝統工芸用具・原材料の代替の可能性について
- ④情報収集等に関する取組状況
- ⑤情報の共有化と活用に対するニーズ、意向・問題点
- ⑥データベースに求める要件、機能、利用可能性
- ⑦業界・ユーザー間及び生産・販売者等とのコミュニケーション・交流・連携等に対する意向 など

4) 調査期間

平成30年2月9日～2月21日

2. 実地調査結果の要旨

2-1. 利用側

<木灰>

【要旨】

一部では昔からの「紺屋灰（こうやばい）」を利用して異分野の工芸家から問題なく木灰を入手、利用しているものの、全体的には繊維の取り出しや染色、釉薬として伝統工芸技術に不可欠な木灰が生産者の廃業や高齢化で入手困難になっている。様々な情報発信、情報収集を図って探索するものの適当な木灰が見つからず、代替品の開発を検討、実施せざるを得ないという状況も生じている。

(ア) 木灰の入手状況と問題点

①「紺屋灰」を利用して木灰を確保（織物 福岡）

かつては鹿児島・枕崎の鯉節産地から副産物として出る木灰を使ったこともあるが、灰に鯉節の臭いが残っているという問題があった。その後各地の灰を試した結果、現在は県内の陶芸家から灰を取り寄せ藍染の pH 調整、アク取りに用い、使用後は陶芸家に戻して再利用するといった昔からの「紺屋灰（こうやばい）」の仕組みで問題なく入手している（浅草の材料販売店に問い合わせると木灰単価はkg当たり1,000円程度）。むしろ問題なのは、高齢化等による藍栽培農家の減少に伴う藍葉の不足・入手難であるとしている。

②全国を探すも望ましい木灰は確保できず（織物 沖縄）

地元の林業製材業者から木灰を入手しているが品質面で満足できる状況にない上、後継者難と高齢化で今後木灰の生産技術・品質のさらなる低下が懸念されている。過去には静岡焼津の鯉節生産者団体も含め全国各地を探したが、品質面で満足できる適当な入手先が見つからなかった。

③入手先の廃業に伴い保有在庫で対応するものの将来は問題（陶磁器 佐賀）

従来は宮崎県の木灰生産者から柞の木（いすのき）を原木とした木灰を入手していたが、既に廃業し入手不能な状況になっている。現在は保有在庫で対応しており、当面必要な量は確保できているが、いずれは新たな確保の手立てが必要になってくる状況にある。

(イ) 問題への対応状況

①木灰は問題ないが、入手難の藍の栽培等を開始（織物 福岡）

木灰は陶芸家から得られているが、藍葉の入手難が喫緊の課題ということで、もともと久留米藍の産地であったことから隣接の八女市などで自ら藍の栽培を手掛け、徳島の藍産地の指導・協力を得ながら自力で藍葉の確保に努めている。

②木灰の代替品開発対応も検討（織物 沖縄）

現在使用している木灰の品質に満足できないこともあり、木灰と同等の化学的な薬剤（炭酸カリウム（ K_2CO_3 ））の成分分析や試験、比較評価等に取り組み、自然の木灰に変わる代替品の研究開発を考えている。

③原木の樹種変更や柞の剪定材利用等で代替を試みる（陶磁器 佐賀）

従来の木灰生産者が操業している時から柞の原木の情報が入れれば共有・支援してきたが、木灰の品質低下（幹のみを灰にするのが理想だが、原木不足により樹皮部分も使用することが原因）等もあり、自ら櫟の灰など代替品開発に取り組んだ。しかしながら柞灰を使用したときの独特の味わいを出すまでには至らず代替にはならなかった。また、100年後を考えた柞の木の植樹活動にも取り組んでいるが、柞の木を茶畑の後に植樹を試みるも育ちが悪く枯れるなどの問題も発生するなど、その植樹育成方法の確立も課題となっている。他方、柞は町の木として高速道路の分離帯等に植えられており、その剪定された枝葉もとにした木灰を試すといったことも取り組んできた。これは使えない訳ではないことが分かり、将来的に一つの選択肢としての可能性があるかと位置付けている。

(ウ) 伝統工芸品制作・技術との関係

①木灰の pH 調整に加え水質や藍葉で独特の色を追究（織物 福岡）

藍染の技術・品質的には pH 調整の木灰に加え、藍葉や水質が大きく影響することから良い水質、藍葉を求め、久留米紺特有の薄青（淡い藍色）が発色するように取り組んでいる。このように伝統工芸品制作の現場では、木灰のような1つの原材料の質だけで決まるのではなく、様々な条件や技術も加わり微妙かつ高度な表現を追求している。簡単に代替品に移行できるものではないという工芸家の声が多いのはこうした事情故のことである。

②原材料が確保し難い現状では伝統工芸の要件等を見直すことも必要（織物 沖縄）

木灰は糸芭蕉からの繊維の取り出しや染色に用いるが、芭蕉布で使用する木灰の性質（pH 値）になるような木灰の確保はかなり難しいといわれる。化学的代替品の使用は望ましいことではないが、将来、芭蕉布に使える木灰が確保できなくなったら良

し悪しを言ってはられないという。主原料である琉球糸芭蕉も自前の栽培以外なくなってきたなど、いろいろな原材料が同じような入手難の状況にある。化学的代替品となる炭酸カリウムは木灰の主成分であり対応技術を確立すれば使えないことはないという。伝統工芸といっても、原材料生産者がいなくなり、供給が途絶える状況が現実のものとなってきた中で、昔からの原材料や手法に縛られることでかえって品質の低いものを使用せざるを得ないという問題も生じている。現代の実情にあわせてより良い工芸品をつくるために要件を見直し、変わっていくことも必要ではないかと問題提起している。

③柞の木灰は独特の味わいを出すのに不可欠（陶磁器 佐賀）

この陶磁器は化学的に不純物のないきれいな木灰よりも、ある種の自然由来の不純物が混じる柞の木の木灰を独自技術による調具合で作品の味わい・風味を出すのが特徴で、柞の原木による木灰に拘りがある。既に多くの普及品には炭酸カリウムが使用されているが、最高レベルの作品とは区別される。

（エ）情報の収集・提供、活用の動向

①マスコミやネットワーク利用等による発信・情報収集により入手先を探索（織物 沖縄）

望ましい品質の木灰の探索にあたっては、マスコミ（新聞連載）を通じた情報発信や全国のネットワークを利用した照会・情報収集等にも取り組み、木灰の入手先を探し求めては試し、また、次を求め試してみるということが続けてきたが、現在まで望ましいものは見つかっていない。

②困り事の発信が反応・提供に結び付く（陶磁器 佐賀）

窯の先代は絵具材料となる銅板等の確保が問題になれば、展示会や講演会等を利用して積極的に「困っている状況」を語り発信してきた。それにより、全国様々な所、異分野の人などから反応があり、材料や情報が寄せられることになった。情報を欲しがるだけでなく、様々な機会を生かして情報を発信することで反応が得られることも経験的にあるという。一般に情報は発信するところに集まるとも言われることから、ただ一方的に求めて動くだけでなく、発信に動くことでそれに対する反応として初めて集まる情報もあるという視点は重要な示唆を与えるものといえる。

（オ）生産・販売者やユーザー等の交流・連携について

①組織や分野を超えた交流で若手が参画、牽引（織物 佐賀）

九州の工芸会では幾つかの研究会を持ち、会員間、外部等との交流を図っているが、焼き物を中心とした分野を超えた「古陶器研究会」では地元の原材料屋の二代目若者が参加するようになり、この二代目が積極的に情報の収集や提供、調達の手伝い

等積極的に活動するようになり、今ではこの原材料屋を通じて情報収集、調達するようになっているという。会員間や組織・分野を超えて交流することで生まれるつながり・連携の効果に期待が広がる。

②伝統工芸品の要件・在り方等に関する意見（織物 沖縄）

伝統工芸で木灰を使う技術や文化を持つ全国の人たちがつながることで、まだ伝統工芸の分野と接点のない林業者や木炭業者なども見つかるかもしれない。

グローバル化した現代においては、伝統工芸品の指定要件に縛られず、原材料の産地や入手先についても狭い地域に限定せず、産地や分野・業種を超えて交流し、問題等について話し合い、問題や情報の共有から始めることが必要ではないかといった意見があった。

<木炭（研磨炭）>

【要旨】

漆器や金工等の経済的低迷を反映し、研磨炭の需要が減少する中、代替品の開発、利用も進み、研磨炭の利用は後退し、現場からも消えるなど伝統工芸技術の低下も懸念される。供給と利用の量的なマッチング以上に技術向上に向けた質的なマッチングが必要となる一方、今の経済的状況の打開を図り、その裾野の拡充を図ることも必要となっている。

（ア）研磨炭の入手状況と問題点

①研磨炭を使える人の減少、質的な情報のマッチングが必要（漆芸 東京）

代替品の開発が進み、研磨炭の高価格化等もあって炭を使う人が少なくなっている実態がある。特に、基本となる研磨技術の重要性よりも二次的なデザイン等への関心が強く、研磨炭は代替品で済ます傾向にあり、大学の先生も炭を使うことがないため次世代の学生等は代替品が主となり、炭を使うだけでなく、目にする機会さえ失っているのが現状という。問題の焦点は、研磨炭の量的な需給のマッチングよりも、扱うユーザー・生産者の技術的・質的な面の情報の共有であり、そのために交流・マッチングが必要となっていると指摘されている。

②ユーザーが情報に惑わされる傾向が材料等の需給や生産者の経営に影響する

（漆芸 東京）

いまや研磨炭の需要の多くを担っている福井の木炭生産者で研磨炭が作れなくなっても、個人的には既に確保しているためただちに問題は生じないが、販売業者から「炭がなくなるよ」といった情報が発せられたら皆が群がり、自分の炭の確保に走るのではないかと思われ、過去には実際そうした状況が発生している。いわゆる買い溜めを含め一時的に需要の先食い状態になることで、生産・販売側では経営の持続性・安定性に悪影響をもたらし、結果的にそれが炭の需給に影響することも懸念される。

③需要低迷で、使う技術を習得しても先がない（漆芸 香川）

研究所の学校では県の全面的な補助もあり、無償で炭や画材等が入手できるので学生達は研磨炭を使用し、技術習得に励むことができている。しかし、漆が産業として成立していない現状では、学生の卒業後のキャリアパスが閉ざされていることから、次世代の人材確保、漆芸の技術継承が難しくなっており、低迷する漆関連の需要開拓、経済活性化が課題となっている。

④木炭価格高騰と代替品の改良進歩で大学は代替品利用にシフト（金工 山梨）

金工の大学の先生や学生は、以前は研磨炭を使用していたが、代替品の開発や炭の高価格化等に伴って現在はほとんど使用せず、代替品の利用に留まっている。

（イ）問題への対応状況

①木炭の供給者とユーザーの技術交流、相互の切磋琢磨が必要（漆芸 東京）

漆関連の伝統工芸技術の継承には工芸家等ユーザーの技術向上に留まらず、研磨炭の高品質化が求められている。炭供給側とユーザーの両者が交わり、相互に高技術、高品質化を目指すといった対応が重要となっている。

②やめた工芸家や業者の保有在庫等の再分配（漆芸 香川）

研磨炭の高価格化、供給不足への対応として、亡くなったり、活動をやめた工芸家や廃業した生産者の保有在庫の再分配を進める取組も行われている。師弟や工芸家間だけでなく、材料販売店が引き取り、求めるユーザーに回すといった動きも出ている。

（ウ）伝統工芸品製造・技術との関係

①高品質な研磨炭が高度な蒔絵技術を支える（漆芸 東京）

木炭は原木の年輪の入り方や内・外側等で性質が異なり、研磨炭の柔軟性や硬さが出、硬いと研磨による傷が出やすい、上滑りになる等の問題も出てくる。ダイヤモンド砥石等の代替品など材料によっては傷だけでなく、蒔絵の研ぎが波を打つ傾向にあり、江戸蒔絵などのような伝統工芸技術に不可欠な平面づくりを図るためには良質な研磨炭の確保とそれを使える技術の習得・伝承が求められる。

（エ）情報の収集・提供、活用について

①木炭生産者と工芸家の情報交流、マッチングが不可欠（漆芸 東京）

木炭生産者とユーザー・工芸家の両者が接点を持ち、それがどのように使われどのような仕上がり、作品になるのか等を生産者も知る必要がある。それによって木炭に求められる品質等を生産者が認識し、相互に切磋琢磨して高技術・高品質化を目指すことにつながる。そのために両者の情報交換と情報活用が重要となるという。

②不明確な情報の影響を懸念、正確な情報共有の仕組み等が必要（漆芸 東京）

供給が限られる材料などは、問屋など販売業者を源とする情報や伝聞情報等によって、ユーザーが不安に駆られて買い占めに走る傾向にあるように、発信される情報の種類や精度等によっては当該品の生産・利用双方に大きな影響を与えることも懸念さ

れる。このことから正確な状況を共有できる情報発信・情報共有の仕組みが必要ではないかという。

③海外への発信により関心・需要を高める（金工 山梨）

ブランドを有する工芸家や産地が「困りごと」等を発信すると内外から多くの情報、支援の提供を受けるケースがみられるが、国内のみならず、関心が高まっている海外に発信し、国内に需要を還流させる方向もあるのではないかと（需要減退で縮小する用具・原材料市場を踏まえて）。

（オ）生産・販売者やユーザー等の交流・連携について

①分野等を越えた交流や発信により原材料の再生・確保につなげる（漆芸 東京）

ある関係の研究会に参加したところ、南鳥島で30数年前から閉鎖環境の中で生態系の定点観測をしており、生息する動物の中にクマネズミがいるかもしれないという情報が入ってきた。長年、蒔絵筆に必要なクマネズミが絶えたと言われてきたが、ひよんな関係から蒔絵筆の再生につながる材料確保の可能性が出てきた。このように、分野を越えて交流する中で積極的に困りごとを情報発信することで意外なところから問題解決につながる情報が得られる場合もある。

②工芸家等ユーザー間の交流・研究活動等も不可欠（漆芸 東京）

工芸会の中では技術等に関する研究会はあまり活発ではなく、また、部会等では今回のような問題が話し合われたことや検討されたことも少ない。まずは工芸家同士でもっと交流・議論する機会を持ち、必要な情報の共有や問題となっていることへの研究等に積極的に取り組むことが必要ではないかという意見がある。

<木炭（燃料炭）>

【要旨】

金工の焼成や着色に不可欠な松炭の入手はそれほど困らない状況にあるが、松炭の品質低下やコスト増が問題となり、様々な情報収集、卸販売との関係づくり等を図りながら対応している。

（ア）燃料炭の入手状況と問題点

○入手できるが品質低下、少量入手でコスト増が問題（金工 京都）

蠟型の焼成や着色のためには高温を保てる松炭が不可欠で、地元卸販売事業者や岩手県の産地から入手し、問題はない。しかし、入手先の後継者難・人材難や松くい虫等による松炭の品質低下、仕入れ量の減少（少量調達）に伴う入手コスト増などが問題になっている。

（イ）問題への対応状況

○地元原材料店との関係づくりが入手確保につながる（金工 京都）

インターネットやネットワーク等を通じて新たな入手先を探し、切り替えている。困った時には、地元の原材料販売店に欲しいもの・品質等をお願いし、販売店のネットワーク等で探し、調達してもらっている。

（ウ）情報の収集・提供、活用について

○ネット利用や地元原材料店との関係が情報収集・活用の源（金工 京都）

地元の工芸家の組合等に加入していない立場であるため、情報収集や材料調達の横のパイプがなく独自に動いている。ネット検索等によって情報収集を図る一方、地元の材料販売店に通い、自らのニーズを伝え、卸販売店のネットワークで情報収集や的確な材料を調達してもらっている。このような従来型の卸・小売業者はハブとなっていることから情報を持っており、うまく利活用することでメリットがある。個人で活動する工芸家のレベルでは、情報の収集・提供とその活用なくして伝統工芸を継続していくことは難しいということから、身近な地域の販売業者も重要な存在となっている。

（エ）生産・販売者やユーザー等の交流・連携について

① 工芸家と材料等の生産者との情報交流がポイント（金工 山梨）

工芸会では材料等の生産者との交流が少ない。生産者側と話し合い、情報共有し、一緒に取り組む土俵を作ることが必要ではないか。

② 経済的状況打開に向けた取り組みが不可欠（金工 山梨）

基本的に木炭の生産者もユーザーの工芸家・職人も経済的に苦しく、行き詰まっている状況にある。まずは出口である経済的状況を打開することが必要であり、木炭生産者や工芸家・職人、若い人など分野横断的に交流し、新商品開発、需要開拓等を進めるプロジェクトのような取り組みを展開していくことが必要ではないかという。ただし、特定の利害関係者と関係のない第三者のコーディネートや事業化ノウハウに長けた経営人材等幅広い人材を巻き込むことも必要な視点である。

2-2. 供給側

<木灰>

【要旨】

木灰の生産は原木調達への対応といった問題はあるものの、樹種にこだわった木灰生産は継続されるが、その需要開拓が課題となり、ユーザーとのマッチングが必要となっている。なお、木灰卸販売事業者へ配慮しながら対応せざるを得ない状況にある。情報収集・発信等の制約も受けており、今後の対応が課題となっている。

(ア) 木灰の生産・販売状況と問題点

○副産物として出る木灰を陶磁器用に販売、需要拡大が課題（水産加工 静岡）

地域の各工場で薪（約9割がコナラ）を燃やして燻しながら鰹節を製造する過程で発生する灰を収集し（顧客によっては篩（ふるい）にかける等により精製する）、木灰として販売している（原価はkg当たり120～200円＋輸送費）。

もともとは食品のアク抜き用としてトチ餅などに利用されていたが、その後信楽の大手陶料屋など陶磁器用にも使用され、土岐市・美濃焼にまで販路を広げ、織部焼に良いとの評価も受けた。

しかし、多くの原木を福島から調達していたため東日本大地震の原発事故に伴い放射線セシウムが基準値を超え、食品向けや美濃焼卸協同組合との取引が停止するなど木灰の需要は大きく減少した。近年徐々に回復してきたが、木灰の有価利用拡大・新たな需要獲得が課題となっている。

(イ) 問題への対応状況

○新たな原木調達先の確保と灰の放射能検査（原発事故の影響払しょく）

（水産加工 静岡）

原発事故対応のため福島に代わる新たな原木調達先を探しに注力し、民有林地権者との交渉ノウハウ等により石川の能登まで手を伸ばしたが、現在は山梨、長野で新たな調達先を確保している。

原木の検査を徹底する一方、原木の162分の1に圧縮される灰のサンプル検査を行い、基準値以下に選別して販売するなど風評の払拭に努め、京都の灰問屋、料理店の囲炉裏や仏壇用等の問い合わせが来るようにはなったが、原発事故前の需要水準には回復していない。

(ウ) 情報の収集・提供、活用について

○材料卸販売店を経由した情報収集、活用に留まる（水産加工 静岡）

顧客ニーズ等の情報は陶料屋経由で入るだけで、直接的に収集・提供することはないが、木灰の需要開拓に向けては今後対応していく必要があるとしている。

今回のような機会を生かし、伝統工芸品関係との関係が築けるようなら積極的に発信し、需要開拓に結び付けたいとしている。

(エ) 卸小売りやユーザー等との交流・連携について

○販売先業者に影響のない範囲で需要開拓に向けた交流に意欲的（水産加工 静岡）

原発事故後も取引を継続してくれている陶料屋との関係上、直接的にユーザー等に販売したり情報提供するようなことは避けているが、問い合わせ対応も含め影響のない範囲内では需要開拓に向けた発信・交流は積極的に取り組みたい。また、陶磁器以外の分野でも伝統的工芸品と連携、セットで灰の新規需要開拓も考えられ、積極的に交流していきたいとしている。

<木炭（研磨炭）>

【要旨】

研磨炭の生産は一人になっても続けていく意向で潜在的な後継者も確保し、原木である日本油桐も採算がとれないような場所には相当数があると見込まれている。しかし、今後は経済的な基盤確立なくしては後継者人材も離れ、原木の伐採・搬出等の投資も難しく、研磨炭の供給も難しくなると考えている。

（ア）研磨炭の生産・販売状況と問題点（以下（イ）（ウ）とも木炭生産 福井）

①需要拡大、収入の確保が課題

需要低迷により生産・販売量は低迷し、単価が安いこともあって人を雇用するのが難しい経営状況にある。需要の開拓、生活できる業にすることが問題となっている。

現在、駿河炭を唯一生産しているといわれる事業者になってしまったが、潜在的な後継者として現場を体現してきた息子二人と地元の地域おこし協力隊として入ってきた若い人も見込まれる。しかし、問題は今後、事業として継続していきけるだけの収入を確保することとしている。

②潜在的に原木資源はあるものの採算性が問題

原木となる日本油桐が無くなるのではと懸念されているが、原木の伐採・搬出等で経済性・採算性が確保できる範囲内での減少・枯渇状態ということで、調査してみると福井県内でも相当数が残っており、島根県等県外を含めれば資源量としては無くなったわけではないという。研磨炭は価格高騰がいわれるが、高いレベルの工芸家等に使われる駿河炭などは生産にそれだけコストがかかるようになってきており、このような原木資源を利用できるよう、採算がとれる価格になることが望まれている。

（イ）問題への対応状況

①地域、分野を超えた外部との交流による新用途開発、需要拡大

伝統工芸を支援する活動を展開している東京の団体等外部の人達と交流するようになり、京都の料理屋や一般家庭向けなど様々な用途の炭の商品開発を手掛け、研磨炭以外での需要開拓による経営の安定化を図るが、現状の収入額では経営的に厳しい状況にある。

木炭生産で生成される木灰にも美濃和紙から問い合わせがあり、kg当たり 300 円で販売した。炭を数多くつくり、出荷価格を安くし、安価な炭を供給すれば漆器や金工以外の分野、用途での炭需要を増やすことは可能だと考えられている。

②事業基盤の確立が経営の持続可能性を左右する

研磨炭の生産は一人になってしまい、結果的に生きている間は生産が継続できる需要が得られると思っているが、技術継承やその後を考えると木炭需要の開拓、生活できる収入を得られる事業環境の確立が急務であるとしている。

何処まで投資して研磨炭を生産するか、その見通しが立たないと難しい。見通しが立てられる経営的環境をつくることが課題であるとしている。

(ウ) 情報提供・活用、販売・ユーザー等との交流・連携

①新商品開発や需要開拓に向けた情報収集・提供と活用

経営を維持するために一般的な用途向けの木炭の新商品開発や需要開拓に向け、情報の発信、収集、その活用に積極的に取り組んでいる。

②地域、分野・業種を超えた積極的な交流の展開

販売は問屋経由等が半分程度であるが、いろいろな人、分野・業種・地域等との交流を展開しており、その関係を生かして今後も新商品開発や需要開拓に向け積極的に取り組みたいとしている。

＜木炭（燃料炭）＞

【要旨】

地権者や地方の木炭生産者等との関係づくり、ネットワーク等を背景に堅調に松炭の生産・販売が展開されている。しかし、地方の木炭生産者の減少等を考えると、資金確保や体制の整備等を図っていかないと、安定した松炭の供給は難しくなる状況にある。

（ア）燃料炭の生産・販売状況と問題点（以下、木炭生産団体 岡山）

○民有林所有者や地方の炭産地等とのネットワークを背景とした生産・販売

管理されていない放置林の無償管理ノウハウを軸に緑の基金等を活用して 30 町歩ほどの民有林、木炭材を確保して燃料用の松炭を生産する一方、岩手の木炭生産者等とのつながりをつくり、松炭を確保し、日本刀匠等の金工分野向けに販売している。

岩手は木炭の主産地で、炭生産の技術的指導と販路拡大を主に活動する団体と販売を主とする組合組織を中心的に展開している。多くは零細な個人生産者が多く主に檜炭を生産、販売するが、一部では松炭も扱っており、県内の民間炭卸販売事業者とともに日本刀など金工向けに販売している。しかし、最近はこの団体が岩手県内の木炭生産者に入り込み、直接的に取引するようになっている。

地方の木炭生産者の多くは高齢者で後継者がいない上、価格が安いいため経営的にも難しく、生産者の減少が問題となっている。

また、この団体では松炭以外に特殊炭や焼き入れ用、研磨炭等にも広げている。研磨炭の開発ではアンケートを添付して全国の漆芸家等へ提供し、反応を確かめながら取り組んでいる。

（イ）問題への対応状況

①木炭生産者に配慮した購入価格のアップによる経営基盤の確保

岩手の木炭生産者は地元の炭問屋等を経由して出荷され、安価な取引に甘んじていたが、東日本大震災に伴い木炭の需給バランスが崩れたことを契機として、出来るだけ高い価格で引き取るようにし、木炭流通の価格引き上げに挑みながら生産者の経営基盤確保に努めている。

一方、上記の岩手県では、震災後には高齢の生産者の多くが廃業し、松炭の需給バランスが崩れる中で、生産者からの購入価格が上昇する割には販売価格に転嫁できないといった状況により経営的には難しくなっている。そのため、ネット販売や檜炭の新商品・用途開発等に努めているということだが、岩手県内の問屋など民間販売業者はそれ以上に影響を受け、経営的に対応が難しい状況にあるようである。

②生産の維持には投資資金、人材の確保が不可欠

現在の体制と資金では現状維持していけるが、地方の木炭生産者の衰退等を考えると減少することが懸念される。全体として現状を維持、増加させるためには新たに1町歩あたり100万円程の投資（炭窯づくり等）が必要となるため、今後は人材、資金の確保が課題となるとみられている。

(ウ) 情報提供・活用、販売・ユーザー等との交流・連携

①様々な関係づくりに向けた情報発信、収集とその活用を展開

民有林地権者や地方の炭生産者等の関係づくりに向けて積極的に現地に入り、発信しながら情報収集・活用を図る一方、炭の試作開発や需要開拓に向けて情報発信・収集と情報活用に取り組んでいる。

②生産者、地権者、ユーザー、異分野との交流を積極的に展開

炭問屋を中心とした流通の変革に挑む取り組みのため問屋等との関係は難しいが、生産者やユーザー、異分野との交流、連携には積極的に取り組んでいる。

3. 実地調査の成果（まとめ）

今回の実地調査では、広範で比較的高度な技術、知見・情報を有している10者を対象に実施したこともあり、アンケート調査では把握できない個別、具体的な実情や問題点、先行的な対応・取り組み事例、意向や提案等を収集することにより次の点が把握できた。

＜実地調査の主な成果＞

- 1) 用具・原材料の入手・販売等の状況と問題点の把握
- 2) 問題への対応状況と今後の方向性の把握
- 3) 伝統工芸品制作・技術との関係性の把握
- 4) 情報の収集・発信・活用状況の把握
- 5) 関係者間の交流・連携の動向の把握

このような調査結果は、実地調査の目的に照らしても一定程度満足する結果が得られたと考えられ、今後も継続して対象分野・品目を広げて取り組むことが必要となろう。また、調査対象者から要望、提案された意見等を踏まえ、ユーザー及び供給者など関係者の主体的・具体的な取り組みの一步に結び付けていくことも求められよう。

1) 用具・原材料の入手・販売等の状況と問題点

陶磁器や染織の分野における木灰、漆芸や金工の分野における炭の利用の状況と問題点を実地調査した結果、次の点が具体的に把握できた。

- ①昔からの仕組み（紺屋灰）を利用した分野を超えた相互の利用
- ②入手先の後継者難、高齢化等による技術・品質低下の中、全国的に探し回るものが見つからず、問題に直面している
- ③入手先が廃業するものの当面は保有在庫で対応できるが、将来的に問題となる
- ④原材料の高価格化や代替品の開発等により研磨炭に利用が減少するとともに伝統工芸技術の低下が懸念される
- ⑤流通段階等から「原材料が無くなる」等の情報が流れてくると、ユーザーが群がり、原材料の確保に走る傾向も見られ、材料の需給関係に影響することが懸念される

- ⑥大学等では代替品の利用に転換する一方、一部学校では無償で配布される材料等をもとに若者が技術習得励むが、卒業後の道が閉ざされ、人材確保、技術継承が難しい状況にある
- ⑦燃料炭は地元卸販売や産地から入手し易いが、品質低下や高価格化が問題となっている

一方、供給側の状況と問題を現地調査すると次の点が把握でき、利用側の実情と照らし合わせると価格や品質など量的、質的に需給バランスが崩れ、双方に問題が生じていることが窺える。

- ①副産物として出る木灰は陶磁器産地等でも評価、利用されるが、原発事故の影響により取引停止となり、木灰の需要開拓が問題となっている
- ②需要低迷により生産・販売量は低迷しており、需要の開拓や後継人材の確保、原木資源の確保等が問題となっているが、そのための経営環境づくりが問題となる
- ③民有林所有者や地方の炭産地等とのネットワークを背景に堅調に供給するものの、炭産地の後退を考えると将来的な供給が問題となろう

2) 問題への対応状況と今後の方向性

ユーザーにおける問題への対応を見ると、次のような対応が試みられ、木灰では代替品開発が現実的問題となっている一方、保有在庫の再配分や材料店の活用など目先対応に留まっている状況がみられる。

- ①自然で伝統的な木灰に変わる代替品の研究開発、試作開発
- ②研磨炭供給側と利用側との技術交流等による相互の切磋琢磨
- ③廃業した工芸家や業者等の保有在庫の再配分
- ④地元原材料店との関係づくりによる欲しいもの・品質等の確保

また、供給側を見ると、原発事故対応が問題となっている木灰を除くと、生産の維持に向けた経営環境の充実に向けた対応が展開されている。利用側のどうしたら入手できるかといった目先対応と比較すると、両者の間には意識面でのギャップがあるように思われる。ユーザー側も供給側の経営的問題にも視野を広げ、両者で問題意識を共有する等の対応も必要となろう。

- ①原木調達先の変更、灰のサンプル検査等による風評の払拭と需要開拓
- ②地域、分野を超えた外部との交流による新用途開発、需要拡大
- ③購入価格アップによる地方炭生産者の経営支援

④炭の生産維持に向けた投資資金、人材の確保

3) 伝統工芸品制作・技術との関係性

木灰や木炭（研磨炭、松炭）と伝統工芸品制作・技術との関係を見ると、染織や陶磁器、漆芸、金工の製品の品質や技術に密接に関係していることが把握できる。

- ①藍染の技術・品質的に木灰の pH 調整のもと良い水質、藍葉で特有の淡い藍色を発色する
- ②繊維の抽出や染色に用いる木灰の性質が織物の品質に大きく影響する
- ③ある程度不純物の混じる木灰が特徴的な風味を出す
- ④高品質な研磨炭と使う技術が高度な蒔絵技術を支える
- ⑤良質な松炭が蠟型の基本となる焼成と着色に不可欠となる

4) 情報の収集・発信・活用の状況

多くの伝統工芸用具・原材料ユーザー及び生産者は次のような手段を用いて積極的に情報収集・発信を行い、用具・原材料の入手先の探索や確保、新商品開発や需要開拓等に取り組んでいる。

- ①マスコミやネットワーク利用による発信、情報収集
- ②展示会や講演会等の様々な機会を通じた「困りごと」の発信
- ③地元材料販売店との関係づくりによる情報収集と発信

しかし、一部の木灰生産者では材料卸販売店経由の情報収集に留まり、その活用も限られる等の問題もみられる。また、卸販売店等から発信される不確実や情報や伝聞情報等による影響も懸念される状況も見られ、正確な情報共有の仕組みづくりが求められている。

5) 関係者間の交流・連携の動向

一部の生産者及びユーザーの中には既に地域や業種・分野等を超えた外部と交流することにより、産地を牽引する若手リーダーの台頭や失われた原材料の再生・確保、新商品開発や需要開拓等に結び付ける等の動きがみられた。

また、ほとんどの生産者及びユーザーは、関係者に留まらず、地域や業種・分野を超えた横断的な交流・連携に対して次のような点で期待しており、交流・連携への要望は相当に強いと思われる。

- ①用具・原材料の問題や伝統工芸品の在り方に関する話し合い、問題意識の共有

- ②工芸家等ユーザー間及び生産者等との技術・研究・情報交流
- ③新商品開発・需要開拓など経済的閉塞状況打開に向けた話し合い、問題の共有

4. 抽出された課題等（今後の調査展開に向けて）

今回の実地調査は、パイロット調査として対象を生産者とユーザー（工芸家、職人等）、比較的高度な知見・技術等を有する方とした。しかし、実地調査を通じて浮かび上がった課題として炭の需要開拓の必要性、情報公開・共有や交流・連携の展開を考えた時、需要のボリュームゾーンを形成する中間・中堅層や将来を担う若者等の裾野を形成する人たちへのアプローチおよび全体的な巻き込み等が必要となろう。

また、木灰の流通における卸販売事業者への配慮等の一定の制約に見られるように、情報の公開や活用が難しいケースもある。今後は実地調査の対象を広げて中堅や若者等の各層の実情や意向、ポテンシャルを把握することも必要となろう。

①流通の中間に位置する卸・販売事業者を対象とした調査

木灰や松炭の事例で見られるように、生産者と卸販売事業者間でこれまでの商慣行が残り、情報がオープンにできない、直接的に生産者とユーザーが結び付きにくい等の問題を抱えている。研磨炭、漆芸の分野ではその垣根が低くなり問題はなさそうだが、他の分野では今後の情報共有やつながり・横断的交流等の展開を考慮すると、問題となる分野・品目での卸・販売事業者も調査対象に加え、実施することが望ましいと考えられる。

②技術的な裾野の中間層及び若者層を対象とした調査

今回の実地調査は、高度な技術等を有する方を対象としたこともあり、技術的な裾野の中間層や若者等の実情、意向等を把握できていない。しかし、研磨炭生産者のハイレベルの研磨炭の生産を維持するためには経営的基盤を確立するための安価な研磨炭の需要開拓が必要であり、そのためには中間層や若者等の意向、ニーズを把握することが必要となる。

IV. 情報提供・情報活用のあり方と課題等の検討

1. 情報提供・活用に対する意向・ニーズ等

○情報源のひとつとして望まれている

これまでの調査を通じて、供給が減少・途絶したり、しつづある用具・原材料に対しては、かなりのユーザーが多方面に手を尽くして入手先を確保しようと動いている実態が明らかになった。そういう観点では方々に求めている情報がポータルの得られるデータベースがあれば望ましいという声は実地調査のなかでも多くの対象者から聞かれたところである。

他方、供給側においても、ユーザーが供給途絶等の伝聞情報に惑わされて買い溜めに走ることでその後の需給ギャップ、生産者・販売者の経営不安定化を増長させるような状況を減らせるのではないかという期待感も感じられた。

需要がどのくらい見込めるのか、必要としている人がどこにどのくらいいるのかも加えて知ることができると、販売増や今後の事業継続や設備投資の判断に役立つという声が目立つ結果となった。

2. 検討課題・問題・留意点等

①情報の正確性・更新は必須、戦略的に情報を出さないことが懸念される

ただし、情報提供の仕組みとして使われるためには、情報の正確性を担保することは言うまでもなく、きちんと更新されることや情報を持っている人が出すことがデータベースの必須要件になる。中でも、販売する側が販路を限定し価格をコントロールするために経営戦略的に情報を出さないという行動は一般の商業活動においてはよく見られることである。供給者が独占的なポジションにある場合は尚のことその効果が得られることから、用具・原材料でも希少なものや供給元が限られる場合は特にそういった懸念がある。

②取引先や入手先など他者の情報の公開・提供に注意

調査対象者の多くは情報の必要性を認識しており、自らの情報については公開・提供に肯定的な姿勢を示している。しかし、取引先や入手先など他者の情報についてはたとえ良く知っている相手であっても勝手に公開・提供する訳にはいかないという声が目立つ。本調査ではアンケートにおいてこうした情報を得ているが、一般論としても「他者の情報」については当事者の確認・承諾の手続きが必要なのは当然であろう。また、それによって情報の正確性を担保することもできる。こうした手続きは構築したデータベースに情報を格納した次の段階の作業として、今後必要になってくることを想定しなければならない。

③ユーザー、生産者、販売者の関係性や情報をつなぐ運用の在り方について

生産者とユーザーが情報でつながると、既存の間屋等が果たしている役割を犯すことになりかねない点を懸念する指摘もあるが、一方では間屋等が持っている機能・役割は棲み分け可能で問題視する必要はないという見方もある。

さらに、そうした観点から情報提供の実施・運営主体については、特定の利害関係を持たず中立的で非営利かつ伝統工芸の事情に精通している性格の組織が担うとよいのではないかという意見がある一方、公的な財源の継続性が担保されない以上は、適切な維持管理に必要な収入を運営の中から賄う意味でも、営利事業ベースで行うべきという意見もある。

今後それぞれのメリット、デメリット等を洗い出し、ニーズに応え活用され持続的な運営・維持管理が可能な仕組みを検討する必要がある。

④「質」の情報提供とすべき

また、提供する情報も性格的に2種類に区別が必要であるとされる。例えば陶土などは「量」の情報、木炭などは「質」の情報となる。情報提供の1つの核は、量を確保する必要があるものの情報、もう1つの核は、使う材料などの質、使う技術、それを扱う人のつながりに関する情報という区分になる。

伝統工芸の文化を支援していく観点から対象とすべきなのは質的な面であるとの指摘もあった。

V. 本調査から見えてきた今後の検討課題

実地調査の成果と問題点を踏まえると、今後の展開としては、次の3点が優先的に検討すべき課題となると考えられる。

- 対象を拡張した実地調査の実施
- 分野を超えた情報共有・技術交流等の促進
- 将来的な情報提供・情報活用のあり方の検討

1. 対象を拡張した実地調査の継続

今回の実地調査では、伝統工芸用具・原材料の中で入手の困難さが指摘され、陶磁器・染織、漆芸・金工等の多くの分野で広く利用されている2品目の原材料（木炭、木灰）を対象にパイロット的な調査を行ったが、当然のことながらこれらの他にも多くの伝統工芸用具・原材料が存在するためさらに対象を拡張して実地調査を継続、実施していくことが必要となろう。

2. 分野等を超えた情報共有・技術交流等の促進

今回の木灰、炭を対象とした実地調査による用具・原材料の実情と問題点、先行した対応事例や意向等の結果を踏まえ、広く指摘された分野等を超えた横断的な情報共有と合意形成を目指す交流会の開催が望まれており、技術交流や新商品開発・需要開拓の検討等を具体的に進め、調査の次の段階に取り組んでいる姿を対外的に発信していくことが課題となろう。

① 分野等横断的な交流の促進

地域、分野・業種、生産者、販売事業者、ユーザーなど横断的な検討体制を構築し、第三者のコーディネーターにより次の点から検討を重ね、ワークショップ等により合意形成を図り、具体的な取り組みに結び付けていくことが必要となろう。

- ・ 供給及び利用に関する現状と問題に関する意見交換
- ・ 問題に対する情報、問題意識の共有と関係者の合意形成
- ・ 問題に対する対応、取り組みについての意見交換
- ・ 問題への対応方向、取り組み方策に関する議論、合意形成
- ・ 取り組むべきプロジェクトの提案と検討
- ・ プロジェクトの可能性と実施内容の検討

② 技術の伝承・交流の促進

生産者とユーザーの両者が集い、相互に用途・使用方法・ニーズ等を勉強したり、生産技術の向上等にフィードバックするなど情報交換を重ね、情報の共有化を図る中で相互に切磋琢磨しながら生産及び利用技術の高度化、高品質化を目指す両者のマッチングを推進する環境づくりが重要であろう。

③ 新商品開発・需要開拓のための交流による取組促進

利害関係者と関係ない第三者のコーディネートの下、生産者や工芸家・職人、若者などが分野横断的に交流し、低迷する経済状況の打開に向けた新商品開発、需要開拓に関して意見交換を行う一方、アイデア等の提案を受けながら、顧客ニーズや需要動向、事業化ノウハウ等に明るい外部のマーケティング人材、経営人材等幅広い人材を巻き込むことにより新商品開発・需要開拓の取組促進を図る。

3. より発展的な情報提供・情報活用の可能性についての検討

① 双方向型の情報交換可能な機能の追加

今回の実地調査の中で、自ら積極的な情報発信を続けることによって、逆に多方面から情報を得る機会を獲得できているといった取り組み事例が見られたことから、一方通行の情報入手ではなく、誰もが情報発信者になれる双方向型の機能を持った仕組みが有効であると考えられる。

SNSの普及で多くの人がある利便性や得られるメリット・効果を認識するようになった現在、離れている人どうしても双方向で情報交換が可能な機能をデータベースの発展的或いは補完的な機能として追加することが望まれる。調査の中でも「産地が集合して問題を出し合う場があると何らかのヒントがあるのではないかな。灰の文化つながり。」といった提案もあり、実際に集まる機会を補完するバーチャルなツールとしてもニーズに合うのではないかな。また、漆芸の分野で本物の研ぎ炭を使用する機会・経験がなく技術が途絶えつつあるという実態や、原材料の生産者が工芸家の技術・使い方を学ぶことで品質向上につながるという指摘に対しても、効果的に利用できるのではないかな。こうした機能を活用することで実際の交流、人や情報のつながりを促進する効果が期待できる。

② 海外からの需要を喚起・拡大する発信ツールとして

日々増加するインバウンドの消費や盆栽、南部鉄器などに見られる実際の海外市場の拡大状況をみると、伝統工芸の分野でも海外からの需要を喚起・拡大し、工芸家や用具・原材料の生産販売に携わる人々の収入の拡大につながる取組をもっと注力すべきであるとの意見があり、生産者・ユーザー等の間にも同様の考え方を聞くことが比

較的多かった。その背景には伝統工芸品の需要低迷により十分な収入が得られない関係者の実情がある。

そうした観点から需要喚起にもつながるよう、工芸家が用具・原材料の情報を入手するためだけでなく、伝統工芸ならではの用具や原材料をどのように生産し使っているのかなどの実像を発信することは検討の余地があると考えられる。これまでは優れた工芸家の技術・技法にスポットライトをあてた発信が多かったが、用具・原材料そのものに着目した発信はあまり行われてきていない。展示施設などに行かなければ見られないのではなく、海外に向けて発信することが重要で、機械や化学品で大量生産されるものとの本質的な違いをアピールし、その価値が認識されるような用具・原材料に関するいちばんの情報源としてデータベースを生かすこと。それによって、伝統工芸分野全体の需要の底上げを図り、工芸家のみならず用具・原材料の生産者まで収入が増え、事業の継続、生活の安定が得られるような環境づくりにつなげることが必要な時期に来ているといえる。こうした課題には、様々な主体の連携・協力も必要となってくることから、中長期的なスパンで段階的に取り組んでいくといった姿勢も求められよう。

資料編

ユーザーに対する調査結果（分野別）

用具・原材料のユーザーのアンケート調査で得られた回答について、具体的にどの品目がどのような状況にあり、何が問題になっているのか等を明らかにするため、陶芸、染織、漆芸、金工、日本刀、木竹工、人形、手漉和紙の各分野別に調査結果を整理・分析した。

（1）陶芸

【要旨】

- ① 陶芸分野のユーザーでは、後継者がいる割合は半数を超え、全体平均（36.1%）よりかなり高い。代表者、後継者の平均年齢はともに全体平均よりやや若い。また、用具・原材料が入手しやすいという回答も全体平均 36.7%より高いなど、分野として比較的活力が高いことが窺える。
- ② 使用している用具・原材料で入手しにくいという品目は、産地で採掘制限されているといわれる岐阜・佐賀など一部産地の陶土・陶石・粘土類、また、生産者の減少・廃業などが影響しているとみられる炭・木灰類、さらに、紅柄などの釉薬原料などが挙げられている。しかし、粘土や木灰などはユーザー側で5年分以上確保できているなど比較的長期間の必要量が確保されているという回答も目立ち、ユーザー側で対応している様子も窺える。
- ③ 今後の入手先の状況は、木灰・薪、陶土・粘土類などについて、「将来無くなる可能性がある」、或いは「既に無くなることが決まっている」という回答が半数近い 47.9%を占める。同時にそれらの入手先の転廃業や生産中止、後継者難などが問題となっている。
- ④ これらの問題等への対策がとれているのは 32.6%にとどまり、出回った時に確保、合成品に代替など個別かつ目先の対応が目立ち、根本的な解決につながるような取組はあまり見られない。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

代表者（個人は当人）の平均年齢は 60.7 歳で全体平均よりやや若い。最高齢は 82 歳、最年少は 38 歳となっている。

表 38 代表者の年齢

代表者の平均年齢	60.7 歳	回答数:60	—
代表者の最高齢	82 歳	代表者の最低齢	38 歳

2) 後継者の状況

「後継者有り」という回答は半数を超えるが「後継者無し」も47.2%と大きく分かれている。平均年齢は35.5歳と全体平均よりやや若い。

表 39 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	52.8%	28
2	後継者無し	47.2%	25
	計	100.0%	53
	後継者の平均年齢	35.5歳	26

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か

使用している用具・原材料のうち、「入手しにくい（難しくなっている）」という回答が半数超の55.0%に達している。

表 40 用具・原材料の入手しやすさ

		構成比	回答数
1	入手しやすい	45.0%	45
2	入手しにくい(難しくなっている)	55.0%	55
	計	100.0%	100

4) 入手しにくい品目の状況

「入手しにくい（難しくなっている）」という品目は、陶土・陶石、粘土、木炭・木灰・薪、紅柄などのその他の釉薬原料で、採取地や生産・製造者の減少・廃業などが理由となっている。

表 41 入手しにくい品目の状況

	品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1	陶土・陶石	25	10	泉山陶石、白川陶石、もぐさ土	・採取地の減少・枯渇、採掘中止
2	粘土	21	11	ひよせ土、白粘土(カオリン)、長石、	・採取地(水田、山)の減少 ・鉱山の廃業
3	木炭・木灰・薪	16	13	松薪、松灰、藁灰、桜炭、栗皮灰	・生産者の減少・廃業 ・松枯れ ・品不足
4	その他の釉薬原料	29	14	紅柄、白玉	・製造業者の減少・廃業 ・輸入不可(原産国生産者の廃業、輸入業者の撤退等)

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

「入手しにくい」という品目の入手先（業者の所在地）をみると、愛知、岐阜、佐賀、宮崎などそれぞれの品目の主要な産地がある地域が挙げられている。

表 42 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	陶土・陶石	岐阜、岡山、佐賀
2	粘土	愛知、岐阜、三重、兵庫、島根、岡山、広島
3	木炭・木灰・薪	愛知、京都、兵庫、島根、佐賀、宮崎
4	その他の釉薬原料	石川、福井、愛知、岐阜、京都、中国(輸入先)

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

用具・原材料の確保できている使用期間をみると、薪（赤松）、珪石、磁土などは「半年未満」、「1年未満」というように比較的短くなっているが、一部の粘土や木灰などは「5年以上」など長期間の必要量を確保している。品目による傾向よりも個々の回答者の確保の状況が表れているようである。

表 43 確保できている使用期間（用具は耐用年数等）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	半年未満	13.0%	7	薪(赤松)、木灰、粘土、珪石、磁土、磁器用鈷
2	1年未満	18.5%	10	木灰、藁灰、漆、長石、粘土(カマ土)、中国黄土
3	3年未満	20.4%	11	木灰(松灰)、朱泥土、薪(赤松)、長石、陶土(五斗蒔土)、白玉
4	5年未満	14.8%	8	白粘土(カオリン)、黒膠
5	5年以上	33.3%	18	粘土(ひよせ土)、柞灰、雑木灰、藁灰、長石、粘土
	計	100.0%	54	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「将来なくなる可能性がある」と「既に無くなることが決まっている」を合わせると47.9%に上り、柞灰などの木灰、赤松の薪、白粘土（カオリン）などといった品目が挙げられている。理由としては生産者の後継者不足、原料枯渇、採取中止、閉山などとなっている。

表 44 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

		構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1	あまり変わらない	33.0%	31	粘土、陶土石、木炭、顔料類、磁器用鈔	(回答無し)
2	減る	19.1%	18	薪(松)、陶土、木灰(松)	良質な材料の不足、採算性、需要減少
3	将来なくなる可能性がある	33.0%	31	藁灰、木灰(栗皮灰)、薪(赤松)、陶土(もぐさ土、五斗蔴土)、白粘土(カオリン)、長石、筆(濃み筆(染付))	後継者不足、原料枯渇、需要減で採取中止、閉山
4	既に無くなることが決まっている	14.9%	14	木灰(柞灰)、漆、薪(赤松)、カオリン、白玉	原料枯渇、廃業、閉山、原産国が輸出せず
	計	100.0%	94	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

問題になっている事としては、「入手先の転廃業、生産中止等」、「入手先の後継者難・人材難等」など入手先の今後に関する事が強く表れている。該当する品目は薪(松)、木灰、藁灰、顔料、粘土、磁器土などが挙げられている。

表 45 入手・確保について、問題・課題になっている事など(複数回答)

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	入手先の転廃業、生産中止等	40.5%	34	薪(松)、木灰、藁灰、顔料、粘土、磁器土、カオリン
2	入手先の後継者難・人材難等	41.7%	35	薪(松)、木灰、藁灰、粘土、顔料、磁器土
3	入手先の技術・品質の低下	14.3%	12	粘土、木灰、陶土
4	材料不足等による仕入先の生産低下	23.8%	20	薪(松)、陶土、木炭、粘土、長石
5	代替品・輸入品等への置き換わり	15.5%	13	粘土、木灰、カオリン、陶磁器用絵具
6	仕入れ減少(少量調達)に伴う入手コスト増	22.6%	19	薪(松)、木灰、粘土、磁器土
7	新たな入手先の開拓が困難	38.1%	32	薪(松)、木灰、粘土、陶土、磁器土、長石
8	上記以外	8.3%	7	木灰、藁灰、粘土
	計	100.0%	84	—

9)問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等をとっている」というのは約3分の1で、陶土（備前）、木灰（松）、漆、カオリンなどが挙げられている。対策の中身は代替品の利用が目立つ。一方、「対策等はとれていない」という品目も重複するものが多く、多くのユーザーではそれらの品目の確保について根本的な対策がとれていない様子が窺える。

表 46 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の主な品目	対策
1	対策等をとっている	32.6%	28	陶土(備前)、木灰(松)、薪(松)、漆、カオリン、粘土、長石、金・銀・白金 など	<ul style="list-style-type: none"> ・陶土(出回った時に確保、窯焼きの頻度を減らす、未使用土を研究、切削した磁器土を再生利用) ・木灰(自ら製造、合成品に代替) ・漆(新たに添加剤を仕入れ調合) ・カオリン(代替品を調合も同等にはならず) ・金・銀・白金(安価な時期に確保)
2	対策等はとれていない	67.4%	58	薪(松)、木灰、藁灰、粘土(信楽、丹波、備前、黒土)、陶土、朱泥土、白磁絵具、顔料(マンガン、コバルト、銅等)、長石、石英、筆など	—
	計	100.0%	86	—	—

(2) 染織

【要旨】

- ① 後継者がいる割合は3分の1の33.3%で全体平均より少し低い。代表者の年齢は60.6歳で他の分野と比べても若い方だが、後継者の年齢は平均的である。
- ② 染織の分野で使われている用具・原材料の66.7%は入手しにくい状況になっており、動物毛の筆・刷毛、絹、箆、藍などで原材料の入手難、生産者の減少・廃業などが背景・理由になっている。これらの入手先は長年の製造業者が集まる東京、京都など都市部が目立ち、ユーザーと近くに存在する特徴が表れている。
- ③ また、確保できている使用期間は藍、繭・絹、糊など染織の原材料関係は半年未満、1年未満と比較的短く、竹箆、刷毛、杼など用具関係は5年以上と比較的長期間の必要量が確保できている傾向が窺える。
- ④ 今後の入手先の状況は、品目の偏りなく、減る、将来無くなる可能性がある、或いは既に無くなるが決まっているという回答が合わせて8割近くに上る。ここでも生産者の減少、後継者難などが理由となっており、生産者の転廃業、生産中止が半数以上で問題としている。
- ⑤ これらの問題等への対策をとっているというのは20.9%にとどまるが、自製（竹箆）のほか、販売業者との情報交換（絹糸、真綿、紬糸）や後継者育成の講習会開催（青苧の手績み糸）といったように、一部ではあるものの組織的・連携した取組が行われている様子が窺える。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

染織分野のユーザーの代表者（個人は当人）の平均年齢は60.6歳とユーザー全体の平均より高く、最高齢は86歳、最年少は55歳であった。

表 47 代表者の年齢

代表者の平均年齢	60.6 歳	回答数:46	—
代表者の最高齢	86 歳	代表者の最低齢	55 歳

2) 後継者の状況

「後継者有り」は約3分の1、後継者の平均年齢は39.1歳で、ユーザー全体平均とほぼ同じような状況にあるといえる。

表 48 後継者の状況

	構成比	回答数
1 後継者有り	33.3%	17
2 後継者無し	66.7%	51
計	100.0%	51
後継者の平均年齢	39.1 歳	13

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か

「使用している用具・原材料のうち、「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が約3分の2の66.7%に達している。

表 49 用具・原材料の入手しやすさ

	構成比	回答数
1 入手しやすい	34.2%	38
2 入手しにくい(難しくなっている)	66.7%	74
計	100.0%	111

4) 入手しにくい品目の状況

「入手しにくい(難しくなっている)」という品目は、絹や芭蕉などの糸・生地、箴・杼・綜紘、藍などの染料・顔料といった品目が挙げられている。その理由としては、生産者・製造者の減少・廃業などが目立っている。

表 50 入手しにくい品目の状況

品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1 刷毛・筆	12	8	引染刷毛、動物毛(鹿など)の刷毛、片羽刷毛、丸刷毛	・生産者の減少・廃業 ・生産者の技術、品質の低下 ・動物毛の入手難
2 糸・生地	34	22	浜縮緬、絹(糸、生地)、生繭、真綿、芭蕉	・生産者・生産量の減少 ・養蚕農家の高齢化・後継者不足 ・原料の入手難
3 箴・杼・綜紘	14	12	竹箴、絵台箴、杼、綜紘	・生産者の減少・廃業 ・既に入手不能な状態 ・専門店が1店のみ
4 染料・顔料	20	10	青花、藍、	・生産者の減少・廃業 ・藍栽培農家後継者の減少
5 糊	10	6	天然ゴム糊、糠糊、布糊、	・天然ゴムの輸入が減少 ・原材料の価格高騰
6 その他の材料	18	11	木灰、洪紙、口金・先金、鉄分含有の沼泥(黒八丈)	・良質な和紙の減少 ・原材料の価格高騰 ・泥の枯渇
7 その他の用具	12	6	竹籠、織機	・部品生産者が廃業 ・製造者の減少

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

「入手しにくい」という品目の入手先（業者の所在地）をみると、糸・生地は福島、群馬など絹の産地、箴・杼・綜紘は京都、鹿児島など竹の産地、染料・顔料は京都、徳島といった産地がある地域が挙がっている。

表 51 「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	刷毛・筆	東京、京都、鹿児島
2	糸・生地	福島、茨城、群馬、東京、京都、長崎、沖縄
3	箴、杼、綜紘	茨城、東京、京都、鹿児島
4	染料・顔料	東京、京都、徳島、福岡、佐賀
5	糊	東京、京都
6	その他の材料	東京、三重、京都、沖縄
7	その他の用具	三重、京都

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

用具・原材料の確保できている使用期間をみると、藍、糸、糊、木灰などは「半年未満」、「1年未満」というように比較的短くなっている。一方、「5年以上」など比較的長期間の必要量を確保している品目は竹箴、刷毛、口金などが挙げられている。使用量の比較的多いものや消耗品的な性格の品目は短い傾向が表れているようである。

表 52 確保できている使用期間（用具は耐用年数等）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	半年未満	18.7%	14	藍、織用具(整経器、かせ上げ器など)、天然ゴム糊、繭、手紬糸、竹箴、布糊・糯糊、鉄分含有の沼泥(黒八丈の媒染用)
2	1年未満	25.3%	19	小紋糠、青花、藍、絹、生糸、糯糊、刷毛、芭蕉、木灰
3	3年未満	21.3%	16	筆・刷毛、糸綜紘、生糸、渋紙、糯粉、白糖、国産紬糸、
4	5年未満	13.3%	10	畔織、動物刷毛、絹糸、手紬糸、口金、先金、中金
5	5年以上	21.3%	16	竹箴、日本製刺繍手打針、刷毛、杼、渋紙、先金、中金、平金
	計	100.0%	75	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「将来なくなる可能性がある」と「既に無くなることが決まっている」を合わせると4割を超え、該当する品目として、絹、藍、糯糊、鉄分含有の沼泥などが挙げられている。理由としては生産者の減少、原料の枯渇などが挙げられている。

表 53 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

		構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1	あまり変わらない	13.0%	14	刷り込み筆、伸子、桁、糊、染料、顔料、糯粉、白糖、絹糸 など	・代替品の開発 ・生産の縮小
2	減る	44.4%	48	絹糸、絹縮緬生地、刷毛・筆（動物毛）、先金、中金、日本製刺繍糸、布糊、藍、型紙、渋紙、青苧 など	・高齢化・後継者難 ・国産品の入手困難
3	将来なくなる可能性がある	38.9%	42	絹糸、藍、杼、糸綜紬、青花、竹箴、繭、真綿、手紬糸、糯糊、先金、鉄分含有の沼泥など	・養蚕農家の減少 ・製藍技術の劣化 ・泥資源の枯渇
4	既に無くなること が決まっている	3.7%	4	竹箴、畔織、芭蕉、ひじき（緯糸を織りかえす用具） など	・既に生産・製造していない
	計	100.0%	108	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

入手・確保の上での問題等としては、「入手先の転廃業、生産中止等」、「入手先の後継者難・人材難等」など入手先の今後に関する事が半数超と比較的多くなっている。該当する品目は竹箴、染料、筆・刷毛、絹糸などが挙げられている。また、「入手先の技術・品質の低下」、「材料不足等による仕入先の生産低下」も30%を超えており、繭・絹糸、芭蕉、木灰、藍、天然ゴム糊などが挙げられている。

表 54 入手・確保について、問題・課題になっている事など（複数回答）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	入手先の転廃業、生産中止等	50.6%	45	竹箴、染料、織用具、筆・刷毛、絹糸 など
2	入手先の後継者難・人材難等	56.2%	50	筆・刷毛、絹糸、杼、糸綜紬、先金、中金、青花 など
3	入手先の技術・品質の低下	32.6%	29	繭、絵台箴、芭蕉、木灰 など
4	材料不足等による仕入先の生産低下	34.8%	31	藍、天然ゴム糊、筆・刷毛（動物毛）、国産絹糸・繭 など
5	代替品・輸入品等への置き換え	24.7%	22	絹糸、手紬糸、渋紙、口金、型糊、型紙、青花 など
6	仕入れ減少（少量調達）に伴う入手コスト増	25.8%	23	先金、糯糊、布糊、青花、型紙、絹糸、真綿、渋紙、織機 など
7	新たな入手先の開拓が困難	20.2%	18	刺繍手打針・刺繍釜糸（日本製）、絹糸、繭、真綿、手紬糸、刷毛 など
8	上記以外	4.5%	4	—
	計	100.0%	89	—

9)問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等をとっている」のは約2割にとどまり、該当品目として糸・生地、糊、型紙、箴などが挙げられている。対策の中身は「多めに確保」、「代替品の導入」に加え、「研究会で組織的に自製」、「販売業者との情報交換」、「後継者育成の講習会」といった能動的・組織的に動く取組が行われている。

表 55 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の 主な品目	対策
1	対策等をとっている	20.9%	18	糸・生地、 糊、型紙、洗 紙、箴 など	<ul style="list-style-type: none"> ・(糸、刷毛、糊筒)多目に注文し在庫を確保 ・(絹糸)自家生産、(竹箴)研究会で組織的に自製 ・(箴)代替品導入 ・(絹糸、真綿、紬糸)販売業者との情報交換 ・(青苧の仕組み糸)後継者育成の講習会を開催
2	対策等はとれていない	79.1%	68	刷毛・筆 糸・生地 箴・杼・綜紘 染料・顔料 など	—
	計	100.0%	86	—	—

(3) 漆芸

【要旨】

- ① 後継者がいる割合は4分の1の25.9%で全体平均より低い。代表者の年齢は62.2歳で後継者の年齢とともに平均より少し若い。
- ② 用具・原材料の72.7%は入手しにくい状況になっており、他の分野よりやや高い。動物毛の筆・刷毛、木炭のほか、螺鈿用具材、輪島地の粉などで産地の供給制限・供給量の不足、生産者の減少・廃業などが背景・理由になっている。これらの入手先は特定の産地しか供給元がないものもあり、確保できている期間も比較的短い状況となっている。
- ③ 今後の入手先の状況についても、これらの品目では将来無くなる可能性がある、或いは既に無くなる事が決まっているという回答が目立ち、ユーザーから入手難の理由・産地の状況がある程度見えていることが窺える。
- ④ これらの問題等への対策をとっているというのは36.8%と比較的高い割合になっており、代替品を試用・購入、試作品テストへの協力など既に確保できなくなる状況を見据えて、本格的に新しい代替品へのアプローチへの動きが見られる。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

代表者（個人は当人）の平均年齢は62.2歳で全体平均よりやや若い。最高齢は82歳、最年少は36歳となっている。

表 56 代表者の年齢

代表者の平均年齢	62.2 歳	回答数:63	—
代表者の最高齢	82 歳	代表者の最低齢	36 歳

2) 後継者の状況

「後継者有り」という回答は25.9%にとどまり「後継者無し」が4分の3近い74.1%となっている。平均年齢は37.3歳と全体平均に近い。

表 57 後継者の状況

	構成比	回答数
1 後継者有り	25.9%	15
2 後継者無し	74.1%	43
計	100.0%	58
後継者の平均年齢	37.3 歳	13

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か

使用している用具・原材料のうち、「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が4分の3近い72.7%に達している。

表 58 用具・原材料の入手しやすさ

	構成比	回答数
1 入手しやすい	27.3%	44
2 入手しにくい(難しくなっている)	72.7%	117
計	100.0%	161

4) 入手しにくい品目の状況

「入手しにくい(難しくなっている)」という品目は、蒔絵筆・漆刷毛などの刷毛・筆、駿河炭・呂色炭などの木炭、輪島地の粉、一部の木材などが挙げられている。理由としては採取地や生産・製造者の減少・廃業などとなっている。

表 59 入手しにくい品目の状況

品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1 漆	41	20	国産漆	・生産者の減少・廃業 ・文化財修復等で国産漆の入手難
2 木炭	31	23	駿河炭、呂色炭など	・生産者の減少 ・販売店の減少・入手難
3 刷毛・筆	35	29	蒔絵筆、漆刷毛など	・製造業者の減少・廃業 ・既に生産されていない ・良い素材の減少(良質の人間の髪の毛、動物の毛)
4 顔料	6	4	水銀朱、本朱(黄口、赤口、黒田朱)など	・生産者の減少・廃業 ・現在日本の生産者は2業者(1業者は後継者有)
5 螺鈿用具材	7	7	玉虫貝、鮑、夜光貝、白蝶貝など	・品質低下・サイズ小型化 ・国産が品薄で韓国産を購入せざるを得ない
6 その他の材料	41	30	輪島地の粉、古野和紙、麻布紙、木材(能登ヒバ、檜、柿など)	・輪島地の粉は地元組合員以外入手不可能 ・森林の荒廃で良質な木材が減少
7 その他の用具	12	9	鋸、鉋、くじら篋など	・使い捨ての鋸になっている ・生産者死亡

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

「入手しにくい」という品目の入手先（業者の所在地）をみると、漆は岩手、茨城など、木炭は石川、福井、刷毛・筆は埼玉、愛知、京都といった産地がある地域が挙がっている。

表 60 「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	漆	岩手、茨城、長野、福井、京都、和歌山
2	木炭	石川、福井、
3	刷毛・筆	埼玉、愛知、京都
4	顔料	福井、大阪
5	螺鈿用具材	石川、大阪、
6	その他の材料	東京、富山、三重、奈良
7	その他の用具	石川、京都、兵庫

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

用具・原材料の確保できている使用期間をみると、漆、蒔絵筆、螺鈿貝などは「半年未満」、「1年未満」というように比較的短くなっている。駿河炭などの木炭、水銀朱、漆刷毛などは「5年以上」など長期間の必要量を確保している。品目による傾向とともに個々の回答者の確保の状況が表れているようである。

表 61 確保できている使用期間（用具は耐用年数等）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	半年未満	9.2%	11	漆、蒔絵筆、玉虫貝、鮑、蝶貝、夜光貝、メキシコ鮑
2	1年未満	20.0%	24	漆、金粉、輪島地の粉、蒔絵筆
3	3年未満	30.8%	37	漆、蒔絵筆(猫毛)、刷毛(狸刷毛)、木炭(駿河炭)、厚貝螺鈿
4	5年未満	20.8%	25	木炭(駿河炭、呂色炭、椿炭)、夜光貝、白蝶貝、黒蝶貝
5	5年以上	19.2%	23	刷毛、顔料(水銀朱)、木炭(駿河炭、朴炭、呂色炭)、櫨材、柿材、枺材、漆刷毛
	計	100.0%	120	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「将来なくなる可能性がある」と「既に無くなることが決まっている」を合わせると4割を超える。該当品目としては、駿河炭などの木炭、螺鈿貝材、漆、輪島地の粉、蒔絵筆などが挙げられている。理由としては生産者の後継者不足等による減少・廃業、原料毛などの枯渇などとなっている。

表 62 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

		構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1	あまり変わらない	18.6%	29	漆、麻布	・代替品の開発 ・生産の縮小
2	減る	39.7%	62	漆、刷毛、白蝶貝、青貝	・生産者の廃業、高齢化・後継者難 ・原料(動物毛)の入手困難 ・良質の原貝が減少
3	将来なくなる可能性がある	37.2%	58	木炭(駿河炭、呂色炭、椿炭) 螺鈿貝材(夜光貝、白蝶貝、黒蝶貝など) 漆、輪島地の粉、蒔絵筆	・後継者難 ・原材料が入手難 ・国内に2業者しかいない ・漆の木の計画的育成がされていない
4	既に無くなることが決まっている	4.5%	7	輪島地の粉、鋸等刃物 蒔絵粉(赤金粉、水金粉、金露王) 顔料(水銀朱、カドニウム朱など)	・地元組合員以外入手不可能 ・需要減少(手研ぎ作業等がなくなりつつある) ・製造中止(材料を作る時に水銀、カドニウムを用いる為)
	計	100.0%	156	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

入手・確保の上での問題等としては、「入手先の後継者難・人材難等」が60.9%とやや目立つ多さとなっている。該当品目は漆、木炭、刷毛・筆などが挙げられている。また、「新たな入手先の開拓が困難」も35.8%と比較的多く、該当品目として白蝶貝などの貝材、砥石、地の粉、朱顔料(水銀朱)などが挙げられている。

表 63 入手・確保について、問題・課題になっている事など（複数回答）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	入手先の転廃業、生産中止等	37.1%	56	顔料、刷毛、漆、木炭、地の粉
2	入手先の後継者難・人材難等	60.9%	92	漆、木炭、金粉、漆刷毛、蒔絵筆、
3	入手先の技術・品質の低下	19.2%	29	漆刷毛、蒔絵筆、厚貝、夜光貝、蝶貝など
4	材料不足等による仕入先の生産低下	29.1%	44	刷毛、木炭、木材、金・銀・鈴粉、鋸等刃物、桐箱、木炭、沈金ノミ、砥石
5	代替品・輸入品等への置き換わり	21.2%	32	木炭、蒔絵筆、くじら篋、砥石、朱顔料
6	仕入れ減少(少量調達)に伴う入手コスト増	22.5%	34	漆、蒔絵筆、和紙、厚貝、夜光貝、蝶貝など
7	新たな入手先の開拓が困難	35.8%	54	白蝶貝、青貝、漆、砥石、木炭(研ぎ炭、駿河炭、呂色炭)、豆鮑、地の粉、朱顔料(水銀朱)
8	上記以外	5.3%	8	—
	計	100.0%	151	—

9) 問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等をとっている」のは36.8%あり、該当品目として漆、刷毛、顔料、螺鈿貝材、木炭などが挙げられている。対策の中身は「大量仕入れ」、「廃業を見越して確保」といったまとめ買いの一方、植樹や代替品の試用、他産地や同業者などからの情報交換などにも取り組んでいる。

表 64 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の主な品目	対策
1	対策等をとっている	36.8%	50	漆、刷毛、顔料、螺鈿貝材、麻布、木炭、砥石 など	<ul style="list-style-type: none"> ・使用量を見越して大量仕入れ ・廃業を見越して確保 ・漆の植樹 ・代替の人工毛を試用 ・代替産地と情報交換、代替品を購入 ・同業工芸家から情報入手 ・麻布から紙布に代替 ・在庫の確保、異業種(化粧品メーカー等)へ製品開発依頼・試作品テストへの協力 ・製炭業者に直接要望を伝え、生産してもらっている ・人工砥石、耐水ペーパーを使用
2	対策等はとれていない	63.2%	86	漆、刷毛・筆 など	—
	計	100.0%	136	—	—

(4) 金工

【要旨】

- ① 代表者の平均年齢 67.6 歳はやや高いが、45.7%は後継者が有り、平均 37.8 歳と比較的若い。
- ② 用具・原材料の 55.7%は入手しやすいと比較的高い割合となっている。金銀銅など主材料が一般的な金属類であることが反映している。
- ③ 入手しにくい品目としては木炭のほか、当金（金型）、刃物（鎌・鉋・斧・鳶・鋤・柄鎌・鋸・包丁）、鑿株、砥石といった用具類が多く、理由として生産者の減少・廃業が目立っている。
- ④ 確保できている期間は七宝焼きの材料類は半年未満など比較的短い傾向が見られるが、砥石、鑿、糸鋸などの用具類、当金、銀線などは比較的長期間の必要量が確保できている。
- ⑤ しかし、当金、藍、弁柄、木炭、鑿など「将来無くなる可能性がある」或いは「既に無くなることが決まっている」というものも多数挙げられており、問題として入手先の転廃業、生産中止が 64.9%に上っている。
- ⑥ 問題への対策をとっているというのは 19.7%に過ぎず、木炭、七宝釉薬などの材料類、当金、糸鋸、鑿などの用具類について、新規の生産者・業者から入手、買いだめなど目先の対応策にとどまっている。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

代表者（個人は当人）の平均年齢は 67.6 歳で全体平均よりやや高い。最高齢は 91 歳、最年少は 39 歳となっている。

表 65 代表者の年齢

代表者の平均年齢	67.6 歳	回答数:52	—
代表者の最高齢	91 歳	代表者の最低齢	39 歳

2) 後継者の状況

「後継者有り」という回答は半数近い 45.7%、「後継者無し」は 54.3%と大きく分かれている。平均年齢 37.8 歳は全体平均とほぼ同じ値である。

表 66 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	45.7%	21
2	後継者無し	54.3%	25
	計	100.0%	46
	後継者の平均年齢	37.8 歳	19

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か

使用している用具・原材料について、「入手しやすい」という回答が半数超の 55.7%に上り、「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が多い他の分野とは状況が異なる結果となっている。

表 67 用具・原材料の入手しやすさ

		構成比	回答数
1	入手しやすい	55.7%	64
2	入手しにくい(難しくなっている)	44.3%	51
	計	100.0%	115

4) 入手しにくい品目の状況

「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が分野別で唯一少数派となった金工であるが、入手しにくいという品目をみると、金銀銅の箔・線・粒など、七宝用の顔料、覆輪・胎、鑿株、砥石などが挙げられている。理由としては生産・製造者の減少・廃業などとなっている。

表 68 入手しにくい品目の状況

	品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1	金・銀・銅	39	11	金銀銅箔・線・粒など	・需要減退で生産減 ・専門職人の高齢化
2	木炭・薪	9	7	松炭、朴炭、桐炭など	・生産者の減少・廃業 ・生産規模の減少
3	釉薬	14	6	七宝用釉薬	・製造業者の減少・廃業 ・生産中止 ・メーカーの減少により色数減少
4	その他原材料	20	9	七宝素地・泥七宝、顔料、鋳物砂、七宝の覆輪・胎	・生産者の減少・廃業 ・覆輪・胎の技術保有者が減少
5	その他の用具	31	20	当金(金型)、刃物(鎌・鉞・斧・鳶・鋏・柄鎌・鋸・包丁)、鑿株、砥石	・需要減退で生産減 ・生産者が廃業 ・生産者の技術が低い

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

「入手しにくい」という品目の入手先（業者の所在地）をみると、金・銀・銅は新潟、京都、大阪など、木炭・薪は埼玉、東京、釉薬は愛知、広島といった産地或いは関連産業がある地域が挙がっている。

表 69 「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	金・銀・銅	新潟、東京、京都、大阪
2	木炭・薪	埼玉、東京
3	釉薬	埼玉、東京、愛知、広島
4	その他原材料	東京、愛知
5	その他の用具	新潟、東京、京都

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

用具・原材料の確保できている使用期間をみると、銀、釉薬、顔料など七宝用の材料や刃物類は「半年未満」、「1年未満」と比較的短い回答がある一方、同じような品目でも「5年以上」など長期間の必要量を確保している回答もある。品目による傾向よりも個々の回答者の確保の状況が表れているようである。

表 70 確保できている使用期間（用具は耐用年数等）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	半年未満	17.0%	9	七宝素地、銀材料、七宝用ガラス釉薬、泥七宝・顔料
2	1年未満	20.8%	11	刃物類、鉄瓶の鉉、銀
3	3年未満	26.4%	14	七宝釉薬、七宝の覆輪・胎、赤銅、銀箔、銀線、釉薬、銅胎、木炭、フラックス
4	5年未満	17.0%	9	緑青、糸鋸、藍、砥石、各種やすり、純銀板、純銀線
5	5年以上	18.9%	10	当金、鑿株、七宝立体釉薬、銀線
	計	100.0%	53	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「あまり変わらない」という回答が40.0%に上り、分野別では最も高くなっている。「将来なくなる可能性がある」と「既に無くなること」が決まっているを合わせると約3割で、該当品目としては、当金、鑪、藍、顔料などが挙げられている。理由としては生産者の後継者不足等による減少・廃業と表裏となる需要の減少が挙げられている。

表 71 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

	構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1 あまり変わらない	40.0%	44	包丁、鋏、大工道具等、 地金、漆、和銑、 砥石・研磨用シート、 金剛砂・研磨用シート	・七宝以外に色々な業種が使う
2 減る	28.2%	31	刃物(鎌・鉞・斧・鳶・ 鋏・柄鎌・鋸・包丁)、 金銀線、 釉薬、鑿株、銅板	・金銀線細工をやる人がいなくなる ・材料高騰のため製造業者が続かない ・後継者難 ・銅板の種類が少なくなり特に純度のものがなくなりつつある
3 将来なくなる可能性がある	25.5%	28	当金、鑪、唐銅、藍、 弁柄、木炭、胎、覆輪	・生産者の廃業・減少・高齢化 ・需要減少 ・木炭生産者が減少し、良品が少ない
4 既に無くなることが決まっている	6.4%	7	泥七宝・顔料、鉄瓶の 鉸、鑪、フラックス、薪	・需要減少 ・後継者がいない
計	100.0%	110	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

入手・確保の上での問題等としては、「入手先の転廃業、生産中止等」が64.9%と目立って多くなっている。該当する品目は刃物類、鑪、七宝釉薬、銀線、砥石が挙げられている。また、「新たな入手先の開拓が困難」も35.1%あり、当金、七宝釉薬、弁柄、当金類などが挙げられている。

表 72 入手・確保について、問題・課題になっている事など（複数回答）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	入手先の転廃業、生産中止等	64.9%	50	刃物(鎌・鉞・斧・鳶・鍬・柄鎌・鋸・包丁)、鑪、七宝釉薬、銀線、砥石
2	入手先の後継者難・人材難等	39.0%	30	七宝素地(銅、花柄、藍物など)、鑿株
3	入手先の技術・品質の低下	22.1%	17	当金(金型)、木炭、薪
4	材料不足等による仕入先の生産低下	6.5%	5	弁柄、木炭、鉄工具(鑿、ハサミ、玉台、金槌など)
5	代替品・輸入品等への置き換わり	6.5%	5	砥石、当金類、木炭
6	仕入れ減少(少量調達)に伴う入手コスト増	27.3%	21	緑青、七宝用ガラス釉薬、泥七宝・顔料、鑄物砂、銀線、銀箔
7	新たな入手先の開拓が困難	35.1%	27	当金(金型)、七宝釉薬、包丁、鋏、大工道具等、弁柄、七宝の覆輪・胎、当金類
8	上記以外	10.4%	8	鑿、鑪など
	計	100.0%	77	—

9) 問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等はとれていない」という回答が8割を超え、「対策等をとっている」のは2割に満たない。その該当品目としては七宝釉薬、当金、鑿、鑪、木炭などが挙げられている。対策の中身は「情報収集」、「新規生産者・業者から入手」、「買いだめ」などとなっている。

表 73 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の主な品目	対策
1	対策等をとっている	19.7%	13	七宝釉薬、緑青、銀線、当金、糸鋸、鑿、鑪、木炭 など	・自ら情報収集 ・新規の生産者・業者から入手 ・買いだめ、5年分の材料を確保 ・代用品を使用
2	対策等はとれていない	80.3%	53	七宝釉薬、当金、薪、木炭、胎、覆輪鑿、ハサミ、玉台、金槌など	—
	計	100.0%	66	—	—

(5) 日本刀

【要旨】

- ① 代表者の平均年齢は 65.0 歳だが、後継者は 35.4 歳と若い。しかし後継者有りというのは 28.6%にとどまっている。
- ② 日本刀の性格上、用具・原材料の品目は比較的限られるが、67.2%は入手しにくいと回答している。その顕著なものは砥石、木炭で、採取地の減少・枯渇、生産者の減少・廃業が理由となっている。一方、主原材料の鋼は組織的に確保する体制を確立していることから入手しにくいという回答はゼロでとなっている。
- ③ 入手しにくい品目の代表である木炭（松炭）は 1 年未満、3 年未満と比較的短い傾向が見られるが、砥石、鑪など用具類は比較的長い期間確保されている。
- ④ 今後の見通しとなると、木炭、砥石、鑪などは将来無くなる可能性がある、或いは既に無くなることが決まっているという回答が目立つ。産地での枯渇、需要減少が理由となっており需要と供給の両面で縮小状況による影響が窺える。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

代表者（個人は当人）の平均年齢は 65.0 歳で全体平均と同等。最高齢は 83 歳、最年少は 40 歳となっている。

表 74 代表者の年齢

代表者の平均年齢	65.0 歳	回答数:37	—
代表者の最高齢	83 歳	代表者の最低齢	40 歳

2) 後継者の状況

「後継者有り」という回答は 28.6%にとどまり、7 割以上が「後継者無し」となっている。平均年齢は 35.4 歳と全体平均よりやや若い。

表 75 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	28.6%	10
2	後継者無し	71.4%	25
	計	100.0%	35
	後継者の平均年齢	35.4 歳	9

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か
 使用している用具・原材料のうち、「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が3分の2を超える67.2%に達している。

表 76 用具・原材料の入手しやすさ

		構成比	回答数
1	入手しやすい	32.8%	21
2	入手しにくい(難しくなっている)	67.2%	43
	計	100.0%	64

4) 入手しにくい品目の状況

「入手しにくい(難しくなっている)」という品目は、一部の天然砥石、木炭(松炭)などで、採取地や生産・製造者の減少・廃業などが理由となっている。

表 77 入手しにくい品目の状況

	品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1	砥石	22	19	天然砥石(内雲砥、鳴滝砥など)	・採取地の減少・枯渇、採掘中止
2	鋼	13	0	—	—
3	木炭	13	10	木炭(松炭)	・生産者の減少・廃業 ・松枯れ ・品不足
4	その他の用具・原材料	17	14	各種鑪、天然イボタ、稲藁、鞆(ふいご)	・製造業者の減少・廃業 ・専門の生産者がいない(鞆)

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

「入手しにくい」という品目の入手先(業者の所在地)をみると、砥石は東京、京都、大阪、木炭は岩手、福島、兵庫など産地或いは販売業者等がある地域が挙げられている。

表 78 「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	砥石	東京、京都、大阪、
2	鋼	—
3	木炭	岩手、福島、兵庫
4	その他の用具・原材料	鑪(東京)、稲藁、鹿革(奈良)、朴材(岐阜)など

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

用具・原材料の確保できている使用期間をみると、木炭(松炭)、鋼(玉鋼等)などは「半年未満」、「1年未満」というように比較的短くなっているが、糸、鑢、砥石などは「5年以上」など長期間の必要量を確保している。品目による傾向よりも個々の回答者の確保の状況が表れているようである。

表 79 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

	構成比	回答数	該当の主な品目
1 半年未満	2.2%	1	木炭(松炭)
2 1年未満	23.9%	11	木炭(松炭)、稻藁、砥石、鋼(安来鋼)
3 3年未満	8.7%	4	木炭(松炭)、鋼(玉鋼、和鉄)、鮫の皮、天然イボタ
4 5年未満	17.4%	8	各種鑢、砥石、水牛の角
5 5年以上	47.8%	22	正絹柄糸、鹿革、朴材、鑢、鞆、砥石、吉野紙
計	100.0%	46	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「将来なくなる可能性がある」と「既に無くなることが決まっている」を合わせると38.1%になるが、「減る」という回答が34.9%とやや多くなっている。該当品目としては、砥石、鑢、松炭などが挙げられている。理由としては生産者の後継者不足等による減少に加え、原料の枯渇・閉山等が挙げられている。

表 80 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

	構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1 あまり変わらない	27.0%	17	鋼(玉鋼)、赤銅、砥石、朴材	(回答無し)
2 減る	34.9%	22	天然イボタ、鹿革、木炭、砥石、稻藁	良質な材料の不足、採算性、需要減少
3 将来なくなる可能性がある	30.2%	19	木炭(松炭)、鋼(玉鋼)、鑢、砥石、正絹柄糸(組ひも)、朴材、鞆(ふいご)、松パルプ材	後継者不足、原料枯渇、需要減で採取中止、閉山
4 既に無くなることが決まっている	7.9%	5	砥石(鳴滝砥、内雲砥)、鑢、吉野紙、	原料枯渇、廃業、閉山、原産国が輸出せず
計	100.0%	63	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

入手・確保の上での問題等としては、「入手先の後継者難・人材難等」が64.2%と比較的多くなっている。該当する品目は松炭、玉鋼、稲藁、鞆、砥石などが挙げられている。また、「仕入れ減少（少量調達）に伴う入手コスト増」という回答が56.6%に上り、該当品目として朴材、鮫の皮、水牛の角などが挙げられている。

表 81 入手・確保について、問題・課題になっている事など（複数回答）

	構成比	回答数	該当の主な品目
1 入手先の転廃業、生産中止等	39.6%	21	木炭(松炭)、稲藁、砥石、朴材など
2 入手先の後継者難・人材難等	64.2%	34	木炭(松炭)、鋼(玉鋼)、稲藁、正絹柄糸(組ひも)、鞆、松パルプ材、砥石、朴材など
3 入手先の技術・品質の低下	28.3%	15	木炭(松炭)、鋼(玉鋼)、正絹柄糸(組ひも)、鞆、松パルプ材、砥石、朴材など
4 材料不足等による仕入先の生産低下	11.3%	6	木炭、鋼(安来鋼、砂鉄)
5 代替品・輸入品等への置き換わり	5.7%	3	鑪、鹿革、砥石
6 仕入れ減少(少量調達)に伴う入手コスト増	56.6%	30	朴材、鮫の皮、水牛の角
7 新たな入手先の開拓が困難	41.5%	22	砥石、木炭(松炭)、朴材、鮫の皮、水牛の角、
8 上記以外	7.5%	4	木炭(松炭)、鋼、松パルプ材、砥石
計	100.0%	53	—

9) 問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等をとっている」のは半数近い47.1%に上り、該当品目として木炭、鋼、鑪などが挙げられている。対策の中身は「植林」や「後継者の育成」など組織的な体制での様々な取組が実施されている様子が窺える。

表 82 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の主な品目	対策
1	対策等をとっている	47.1%	24	木炭(松炭)、 鋼、鑪、松パル プ材、砥石	<ul style="list-style-type: none"> ・(木炭)全国団体で木炭生産技術保存会と共に植林などを実施 ・(木炭)入手先を増やしている。炭焼き職人を育てている ・(木炭)自家製鉄・製炭 ・(鋼)後継者の育成 ・(鑪)輸入品で代替、外国製を使用しているが使いにくい ・(砥石)産地から直接購入を考えている、買いだめしている ・(稲藁)田舎を車で走るときに、はで干し農家を探している。また知人へ問い合わせしている
2	対策等はない	52.9%	27	木炭、砥石、 鋼、鑪、 正絹柄糸、鹿 革、 朴材、稲藁、 吉野紙	—
	計	100.0%	51	—	—

(6) 木竹工

【要旨】

- ① 代表者の平均年齢は 67.1 歳、後継者は 34.8 歳と比較的若いですが、後継者有りは 20.0%にとどまっている。
- ② 入手しにくいという品目は 70.1%で、希少な種類の木材、竹材、つる材のほか、専用の刃物類が挙げられている。理由としては製造業者の減少、原材料の枯渇のほか、産地の荒廃や職人の減少による品質低下が指摘されている。
- ③ 希少な種類の木材などが多いため、入手しにくい品目の入手先は特定の地域に限られる様子も窺える。また、確保できている期間は木材より竹材やつる材の方が短い傾向がみられる。
- ④ 入手先の今後については、将来無くなる可能性がある、既に無くなることになっているという回答は竹材と希少性の高い天然木が多数挙げられている。海外を含む産地の伐採・供給制限、生産者の高齢化・廃業などが主な理由となっており、希少な種類の木材・竹材については新たな入手先の開拓が困難という回答が目立ち、供給源が限られた一部の産地しかない状況が表れている。
- ⑤ 問題への対策をとっているのは 30.3%で、植樹・栽培のほか海外産地での加工に乗り出している動きも出ている。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

代表者（個人は当人）の平均年齢は 67.1 歳で全体平均よりやや高い。最高齢は 88 歳、最年少は 33 歳となっている。

表 83 代表者の年齢

代表者の平均年齢	67.1 歳	回答数:	54
代表者の最高齢	88 歳	代表者の最低齢	33 歳

2) 後継者の状況

「後継者有り」という回答は 20.0%に過ぎず、8割は「後継者無し」となっている。しかし後継者の平均年齢は 34.8 歳と全体平均よりやや若い。

表 84 後継者の状況

	構成比	回答数
1 後継者有り	20.0%	11
2 後継者無し	80.0%	44
計	100.0%	55
後継者の平均年齢	34.8 歳	8

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か

使用している用具・原材料のうち、「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が約7割、70.1%に達している。

表 85 用具・原材料の入手しやすさ

		構成比	回答数
1	入手しやすい	29.9%	32
2	入手しにくい(難しくなっている)	70.1%	75
	計	100.0%	107

4) 入手しにくい品目の状況

「入手しにくい(難しくなっている)」という品目は、秋田杉など天然の木材、煤竹など希少な種の竹材、巾決め・鉤などの刃物といったものが挙げられており、原木の枯渇や生産・製造者の減少・廃業などが理由となっている。

表 86 入手しにくい品目の状況

	品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1	木材	31	26	国産天然木(秋田杉、コリヤナギ、御蔵島桑、栃、山桜の樹皮、樺、オヒョウ、シナノキなど)、唐木(紫檀、花梨、柘植、桐)	<ul style="list-style-type: none"> ・原木の減少・枯渇(国産天然木) ・アジアの原産国が伐採・輸出禁止・価格高騰 ・銘木店など取扱業者の減少 ・採取入山者が減少(山桜樹皮)
2	つる材(藤、葡萄)	13	9	藤	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアの原産国が輸出を減らす ・良質の輸入材の減少 ・引き籐を作る人の不足・高齢化による廃業
3	竹材	23	15	煤竹、真竹、矢竹、真竹、すず竹、鳳尾竹、黒竹、足竹	<ul style="list-style-type: none"> ・生産者の減少・廃業 ・温暖化で品質低下 ・生育地が減少・荒廃 ・囲炉裏のある古民家で百年、二百年と燻されて煤竹になる。人工的に作れない(煤竹)
4	その他材(和紙、木炭、絹糸など)	9	6	玳瑁(タイマイ)貝(夜光貝)	<ul style="list-style-type: none"> ・加工品はあるが、原材料が少ない(タイマイ) ・生産者が少ない(夜光貝)
5	塗料・染料(漆、膠など)	19	8	漆(日本産)	<ul style="list-style-type: none"> ・価格高騰(漆) ・生産していない(膠) ・生産地、漆掻き職人の減少
6	用具(刃物、筆など)	19	14	刃物(鉋、のみ、ナタ、鋸、切り出し刃、欽先刃など)、巾決め、かねこばし(皮はぎ用具)、鉤(御翠簾用金具)	<ul style="list-style-type: none"> ・大工が使わないなど需要の減少 ・製造できる人がいない(巾決め、かねこばし) ・入手先の品質、技術低下(切り出し刃、欽先刃) ・製造業者が1社のみ(鉤)

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

「入手しにくい」という品目の入手先（業者の所在地）をみると、木材は北海道、秋田、岐阜など、竹材は京都、福岡・大分など産地或いは販売業者等がある地域が挙げられている。

表 87 「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	木材	北海道(桂、胡桃、シナノキなど)、岩手(樺、桜、樺、タモなど)、秋田(秋田杉、山桜の樹皮)、兵庫(唐木)、岐阜(桐、楠、樺、桧など)、大阪(屋久杉)
2	つる材(藤、葡萄)	東京、千葉、大阪(いずれも藤)
3	竹材	京都(晒竹/白真竹)、奈良、和歌山(真竹)、福岡・大分(真竹、鳳尾竹、黒竹など)
4	その他材(和紙、木炭、絹糸など)	香川(木炭)、富山(桐炭、朴炭)、京都・大阪(玳瑁、象牙)
5	塗料・染料(漆、膠など)	東京(漆)、福井(漆)、香川(漆)、沖縄(琉球藍)
6	用具(刃物、筆など)	東京(漆、指物用金具(引手、蝶番))、京都(砥石、鉤)、兵庫(割子、巾決め、鉋、鋸)、大分(切り出し刃、欵先刃)

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

用具・原材料の確保できている使用期間をみると、分野の特性として木や竹の種類によって細分化されているものが多く、比較的短いものと長期間確保されているものが多種多様である。品目による傾向よりも個々の回答者の確保の状況が表れているようである。

表 88 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	半年未満	9.7%	7	桐、藤、モソ竹(孟宗竹)、杉、檜、琉球藍、絹糸
2	1年未満	15.3%	11	つる材(藤、山ぶどう)、山桜の樹皮、鉤(御翠簾用金具)
3	3年未満	31.9%	23	木材(秋田杉、樺、樺、タモ、唐木材(輸入材)など)、竹材(煤竹、真竹)、藤、漆、イボタろう、指物用金具(引手、蝶番)
4	5年未満	13.9%	10	木材(桤、桧)、竹材(真竹)、砥石、漆、切り出し刃、欵先刃、木釘(うつぎの木釘)
5	5年以上	29.2%	21	木材(樺、御蔵島桑、桤)、日本産漆、刃物(鉋、のみ)、膠、竹工用具(竹割包丁、切出小刀、鋸等)、玳瑁(タイマイ)、象牙
	計	100.0%	72	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「将来なくなる可能性がある」と「既に無くなること
が決まっている」を合わせると37.5%になるが、「あまり変わらない」、「減る」
という回答も30%前後あり、やや分かれている。「将来なくなる可能性がある」と
「既に無くなることが決まっている」という品目は木竹工分野故に一部の希少な樹種・
竹種が多数挙げられている。理由としては生産者の減少に加え、原料の枯渇等が挙げら
れている。

表 89 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

		構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1	あまり変らな い	29.8%	31	竹材、匏、コリヤナギ、籐、 割子、巾決め、かねこぼし、 染料、和紙、絵具など	・白真竹(晒竹)業者の 内情がわからない
2	減る	32.7%	34	桐、藤、秋田杉、鋸、ナタ、 漆、真竹、晒竹、足竹、 工具(巾取り器、裏すき 器)、 イボタろう、玳瑁(タイマ イ)、 唐木材	・(竹)生産者の廃業、後 継者がいない ・(鋸など)職人、後継者 減少、需要減少 ・(藤)原産国の輸出制 限
3	将来なくなる 可能性があ る	32.7%	34	矢竹、真竹、すず竹、秋田 杉、栃、唐木(紫檀、花梨、 柘植)、藤、鋸、匏、鉤、砥 石、桐炭、 朴炭、オヒョウ、シナノキ、 山桜、指物用金具(引手、 蝶番)	・(竹)温暖化、竹採取人 の高齢化・廃業 ・(秋田杉)150年生材木 の枯渇 ・(唐木)海外産地が伐 採・輸出禁止、数量制限 ・(矢竹、真竹、すず竹) 竹が枯れてきている
4	既に無くなる ことが決まっ ている	4.8%	5	煤竹、膠、真竹(晒竹)、膠	・(煤竹)作れないため、 現在あるものを使用す るしかない。 ・(晒竹)地元プロの業 者がいない ・(膠、竹筒)生産者の廃 業
	計	100.0%	104	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

入手・確保の上での問題等としては、「入手先の転廃業、生産中止等」「入手先の後継者難・人材難等」が40%を超えており、真竹、煤竹などの竹材、櫟、藤、鉤、砥石などが挙げられている。また、「新たな入手先の開拓が困難」も46.2%あり、桐、栃など木材のほか、膠、指物用金具類などが挙げられている。

表 90 入手・確保について、問題・課題になっている事など（複数回答）

	構成比	回答数	該当の主な品目
1 入手先の転廃業、生産中止等	41.0%	32	真竹、桐、刃物(鉋、のみ)、砥石、櫟、栃、檜、藤
2 入手先の後継者難・人材難等	48.7%	38	真竹、煤竹、漆、晒竹、鉤(御翠簾用金具)
3 入手先の技術・品質の低下	20.5%	16	真竹、晒竹、漆、藤、鉋、鋸、琉球藍
4 材料不足等による仕入先の生産低下	17.9%	14	藤、白真竹(晒竹)、孟宗竹、染料、絹糸
5 代替品・輸入品等への置き換え	14.1%	11	栃、漆、桐炭、朴炭、象牙
6 仕入れ減少(少量調達)に伴う入手コスト増	17.9%	14	鉋、鋸、山桜の樹皮、
7 新たな入手先の開拓が困難	46.2%	36	桐、栃、檜、藤、唐木、真竹、御蔵島桑、膠、木釘、煤竹、オヒョウ、シナノキ、指物用金具(引手、蝶番)、玳瑁(タイマイ)
8 上記以外	6.4%	5	真竹、矢竹、真竹、すず竹、藤、柘植原木
計	100.0%	78	—

9) 問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等をとっている」のは30.3%にとどまるが、該当品目として秋田杉などの木竹材、漆、膠などが挙げられている。対策の中身は公的機関との「代替材の研究」、「苗木の保護・栽培、植林」や「新たな入手先の検討」など組織的な体制で様々な取組が実施されている様子が窺える。

表 91 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の主な品目	対策
1	対策等をとっている	30.3%	23	秋田杉、コリヤナギ、山桜の樹皮、白真竹、巾取り器、裏すき器、漆、膠、夜光貝、山ブドウ、柘植原木	<ul style="list-style-type: none"> ・(秋田杉)秋田県木材研究所と適材の研究を実施 ・(コリヤナギ)組合で苗木を確保、栽培を保護、皮はぎ用具を貸し出している ・(山桜の樹皮)植林しているが、不足を補うほどにはなっていない ・(白真竹)新たな仕入れ先を検討中 ・(巾取り器、裏すき器)新たな入手先を探す ・(漆)新たな産地から入手。中国産漆を増やしている ・(膠)7年前に買いだめ ・(夜光貝)沖縄の原貝を確保 ・(山ブドウ)栽培を始めた ・(柘植原木)原産地の中国での半製品加工を進めている
2	対策等はとれていない	69.7%	53	広葉樹材(桐、栃、御蔵島桑など) 膠、鉋、鋸、砥石、晒竹、矢竹、真竹、すず竹、イボタろう、天然山桜、籐、手打刃物(胴付鋸)、鉤、琉球藍、漆、指物用金具(引手、蝶番)、唐木材(紫檀、花梨、柘植)	—
	計	100.0%	76	—	—

(7) 人形

【要旨】

- ① 回答数が限られるが、後継者有りという回答はゼロという結果となっている。代表者の平均年齢も 66.8 歳でやや高い。
- ② 用具・原材料で入手しにくいという割合は 58.3%で、胡粉、和紙、膠、粘土などが挙げられている。これらの入手先は東京、愛知、滋賀といった一部の産地に集中している。
- ③ 確保できている期間は品目に限らず比較的ばらついており、刷毛でもボタン刷毛は半年未満に対して胡粉用の刷毛は 5 年以上など回答したユーザーの個別事情が影響する結果となっている。
- ④ 今後の入手先としては、胡粉、布地は製造業者が設備更新を予定していないという理由で既に無くなるのが決まっていると回答している。
- ⑤ また、対策をとっているのは 15.8%、回答者数で 3 人に限られ、職人がいるうちに作ってもらっている（刷毛）、代替品でも仕事ができるよう工夫（胡粉）、買いだめ（膠）といったように、根本的な対策とは言えない類である。無くなる可能性があるという楮成紙、桐粉、粘土などについては対策はとれていない。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

回答数が少ないが、代表者（個人は当人）の平均年齢は 66.8 歳で全体平均よりやや高い。最高齢は 76 歳、最年少は 51 歳となっている。

表 92 代表者の年齢

代表者の平均年齢	66.8 歳	回答数:	8
代表者の最高齢	76 歳	代表者の最低齢	51 歳

2) 後継者の状況

回答数が少ない中であるが、「後継者有り」という回答は無くゼロとなっている。

表 93 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	0.0%	0
2	後継者無し	100.0%	10
	計	100.0%	10
	後継者の平均年齢	—	0

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か

使用している用具・原材料のうち、「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が半数超の58.3%に達している。

表 94 用具・原材料の入手しやすさ

		構成比	回答数
1	入手しやすい	41.7%	10
2	入手しにくい(難しくなっている)	58.3%	14
	計	100.0%	24

4) 入手しにくい品目の状況

回答数はやや少ないが「入手しにくい(難しくなっている)」という品目は、胡粉、和紙、膠などが挙げられている。理由としては生産・製造者の減少・廃業などとなっている。

表 95 入手しにくい品目の状況

	品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1	胡粉	8	4	胡粉	・生産者の廃業 ・質の低下(原料のいたぼがきがなくなっている)
2	和紙	5	3	典具帖、美濃和紙、楮成紙	・生産者がいなくなってきた ・手漉きの物が少なくなっている
3	膠	4	2	膠	・生産者の廃業
4	その他(粘土・木粉・刷毛など)	7	5	信楽土、桐粉、ボタン刷毛、金欄、人絹など	・特注で精製してもら(信楽土) ・製造業者の廃業、生産設備の老朽化

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

限られた回答数ではあるが「入手しにくい」という品目の入手先(業者の所在地)をみると、胡粉、和紙、膠は東京、愛知、粘土は滋賀、刷毛は福岡といったように産地或いは販売業者等がある地域が挙がっている。

表 96 「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	胡粉	東京、愛知
2	和紙	東京、愛知
3	膠	東京、愛知
4	その他(粘土・木粉・刷毛など)	滋賀(信楽土)、京都・広島(金欄、人絹)、福岡(ボタン刷毛)

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

回答数が限られるが用具・原材料の確保できている使用期間をみると、刷毛、胡粉、膠など「半年未満」から「5年以上」まで回答が分かれている。品目による傾向よりも個々の回答者の確保の状況が表れているようである。

表 97 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	半年未満	12.5%	2	刷毛(ボタン刷毛)
2	1年未満	18.8%	3	典具帖、桐粉、胡粉
3	3年未満	31.3%	5	膠、胡粉、楮成紙
4	5年未満	31.3%	5	胡粉、膠、和紙(典具帖、美濃和紙)、粘土(信楽土)
5	5年以上	6.3%	1	刷毛(胡粉用)
	計	100.0%	16	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「あまり変わらない」という回答が4割を超える一方、「将来なくなる可能性がある」と「既に無くなることが決まっている」は合わせて20.8%と他の分野に比べて少なく、人形の用具・原材料は比較的維持される品目が多いと見込まれている。「将来なくなる可能性がある」、「既に無くなることが決まっている」という品目は、胡粉や粘土などが挙げられている。

表 98 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

		構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1	あまり変らない	41.7%	10	胡粉、膠、和紙(石州、典具帖等)	・染色など他の用途がある(和紙、刷毛)
2	減る	37.5%	9	胡粉、膠、和紙(典具帖、美濃和紙)、桐粉	・生産者・職人の減少(和紙) ・後継者がいない(膠)
3	将来なくなる可能性がある	12.5%	3	楮成紙、桐粉、粘土(信楽土)	・需要が少ない(楮成紙、桐粉、粘土(信楽土))
4	既に無くなることが決まっている	8.3%	2	胡粉、布地(金欄、人絹)	・製造業者が需要の拡大が望めず、生産設備の新設を考えていない為
	計	100.0%	24	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

入手・確保の上での問題等としては、「入手先の転廃業、生産中止等」が50%超、「入手先の後継者難・人材難等」、「入手先の技術・品質の低下」が40%を超えており、胡粉、膠、和紙、粘土などが挙げられている。また、「新たな入手先の開拓が困難」が最も多い55.0%あり、胡粉、膠、金欄等の布地類などが挙げられている。

表 99 入手・確保について、問題・課題になっている事など（複数回答）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	入手先の転廃業、生産中止等	50.0%	10	胡粉、膠、楮成紙、粘土、布地（金欄、人絹）
2	入手先の後継者難・人材難等	45.0%	9	胡粉、膠、和紙（典具帖、美濃和紙）、ボタン刷毛
3	入手先の技術・品質の低下	40.0%	8	胡粉、刷毛、和紙、粘土
4	材料不足等による仕入先の生産低下	5.0%	1	ボタン刷毛
5	代替品・輸入品等への置き換わり	20.0%	4	胡粉、膠、和紙（典具帖、美濃和紙）
6	仕入れ減少（少量調達）に伴う入手コスト増	20.0%	4	胡粉、桐粉、膠、布地（金欄、人絹）
7	新たな入手先の開拓が困難	55.0%	11	胡粉、桐粉、楮成紙、膠、布地（金欄、人絹）など
8	上記以外	0.0%	0	—
	計	100.0%	20	—

9)問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等をとっている」のは15.8%（回答数3件）にとどまる。該当品目として刷毛、胡粉、膠などが挙げられている。対策の中身は「職人がいるうちに作ってもらっている」、「代替材の利用」、「買いだめ」などとなっており、やや対症療法的な取組になっている様子が窺える。

表 100 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の主な品目	対策
1	対策等をとっている	15.8%	3	刷毛 胡粉 膠	・（刷毛）職人がいるうちに作ってもらっている ・（胡粉）代替品でも仕事ができるよう工夫 ・（膠）買いだめ
2	対策等はとれていない	84.2%	16	胡粉 和紙（楮成紙、典具帖、美濃和紙） ボタン刷毛 粘土（信楽土） 布地（金欄、人絹）	—
	計	100.0%	19	—	—

(8) 手漉き和紙

【要旨】

- ① 代表者の平均年齢は 68.5 歳、後継者は 43.0 歳と比較的高齢であるが、76.5%と後継者がいる割合は高い。
- ② 入手しにくい品目の割合は 88.6%に上り、簀、桁、雁皮、楮、三椏といった品目は大半が入手しにくいと回答している。理由は生産者の高齢化・減少が共通している。
- ③ 確保できている期間は三椏、雁皮などの原材料は半年未満或いは1年未満、漉簀、簾桁、竹簀などの用具類は5年以上が比較的多くなっている。
- ④ 今後の入手先は、生産者の後継者がいないなどの理由から、雁皮、楮、三椏などの原材料について 34.3%が無くなる可能性があるとしている。一方で、半数の 50.0%が対策をとっているとしており、産地農家との連携（トロアオイ）、行政などと連携して後継者の育成支援（竹簀、楮）などの取組が見られる。

【分析結果】

1) 代表者の年齢

代表者（個人は当人）の平均年齢は 68.5 歳で全体平均よりやや高い。最高齢は 86 歳、最年少は 40 歳となっている。

表 101 代表者の年齢

代表者の平均年齢	68.5 歳	回答数:	16
代表者の最高齢	86 歳	代表者の最低齢	40 歳

2) 後継者の状況

「後継者有り」という回答は 76.5%に上るが、平均年齢は 43.0 歳と全体平均より高くなっている。

表 102 後継者の状況

		構成比	回答数
1	後継者有り	76.5%	13
2	後継者無し	23.5%	4
	計	100.0%	17
	後継者の平均年齢	43.0 歳	8

3) 用具・原材料について、いま購入しようとした場合、入手しやすい状況か
 使用している用具・原材料のうち、「入手しにくい(難しくなっている)」という回答が9割近い88.6%に達している。

表 103 用具・原材料の入手しやすさ

		構成比	回答数
1	入手しやすい	11.4%	4
2	入手しにくい(難しくなっている)	88.6%	31
	計	100.0%	35

4) 入手しにくい品目の状況

「入手しにくい(難しくなっている)」という品目は、簀・桁、楮・三桮などの和紙原料、トロロアオイなどで、他の多くの分野と同様に生産・製造者の減少・廃業などが理由となっている。

表 104 入手しにくい品目の状況

	品目	回答数	うち「入手しにくい」	入手しにくい主な品目	理由
1	簀、桁	15	14	竹簀、かや簀	・生産者が高齢化・減少 ・桁職人が減少・高齢化
2	雁皮	3	3	雁皮	・収穫する人が減少
3	楮、三桮	11	10	国内産楮、那須楮、高知産三桮	・生産者が高齢化・減少 ・生産者がいない
4	和紙	4	2	伊勢型紙地紙	・生産者が減少
5	その他	6	6	トロロアオイ、泥土(東久保土、玉子土、カブタ土、蛇豆土)、紗	・(トロロアオイ)生産者が減少

5) 使用している用具・原材料のうち「入手しにくい」という品目の入手先

「入手しにくい」という品目の入手先(業者の所在地)をみると、簀・桁は岐阜、鳥取、高知、雁皮は兵庫、岡山、楮、三桮は茨城、栃木、岐阜、島根、高知といったように産地或いは販売業者等がある地域が挙がっている。

表 105 「入手しにくい」という品目の入手先

	品目	入手先(業者の所在地)
1	簀、桁	岐阜、鳥取、高知、
2	雁皮	兵庫、岡山、
3	楮、三桮	茨城、栃木、岐阜、島根、高知
4	和紙	岩手、福井
5	その他	茨城・埼玉(トロロアオイ)、福井(いちよう板)、兵庫(泥土)、

6) 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

用具・原材料の確保できている使用期間をみると、楮、三桮、雁皮など和紙の主原料は「半年未満」から「3年未満」というように比較的短くなっているが、簾桁、竹簧など用具類は「5年以上」など比較的長期間確保されている状況が表れている。

表 106 確保できている使用期間(用具は耐用年数等)

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	半年未満	12.9%	4	三桮、雁皮、いちょう板、紗
2	1年未満	35.5%	11	楮、雁皮、トロロアオイ、
3	3年未満	22.6%	7	土佐楮、雁皮、泥土
4	5年未満	9.7%	3	漉簀、和紙
5	5年以上	19.4%	6	簾桁、竹簧
	計	100.0%	31	—

7) 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

入手先に対する今後の見通しは、「将来なくなる可能性がある」は34.3%、「既に無くなることが決まっている」は2.9%（回答数1件）となっている。「将来なくなる可能性がある」という品目はいちょう板、雁皮、トロロアオイのほか、楮、三桮、簾が挙げられているが、後者については「あまり変わらない」という回答もあり、見方が分かれている。「既に無くなることが決まっている」という品目は紗で、生産者がいないという理由が挙げられている。

表 107 入手先は今後どのように変わると見込まれるか

		構成比	回答数	該当の主な品目	理由
1	あまり変わらない	28.6%	10	簾、桁、竹簧、雁皮、泥土、楮、和紙、	(回答無し)
2	減る	34.3%	12	桁、石州楮、土佐楮、三桮、トロロアオイ	・生産と需要の減少、高齢化。 ・需要減少と職人がいなくなる。 ・(高知)県外産のみになった
3	将来なくなる可能性がある	34.3%	12	いちょう板、雁皮、トロロアオイ、楮、三桮、簾	・契約農家の減少、引き継ぐ若手がいらない。 ・リスクの高いイチョウ材を扱う木材商がいらない。他に応用がない。 全国的に紙漉き職人が減る中で、将来性を考えて漉簀を作ろうという人がいない。
4	既に無くなること が決まっている	2.9%	1	紗	・生産者がいない。
	計	100.0%	35	—	—

8) 入手・確保について、問題・課題になっている事など

入手・確保の上での問題等としては、「入手先の後継者難・人材難等」が60%を超えており、該当品目として簀、桁、和紙などが挙げられている。また、「入手先の転廃業、生産中止等」、「新たな入手先の開拓が困難」がいずれも30%を超えており、楮、三桮などの和紙原料などが該当品目として挙げられている。

表 108 入手・確保について、問題・課題になっている事など（複数回答）

		構成比	回答数	該当の主な品目
1	入手先の転廃業、生産中止等	36.4%	12	楮、トロロアオイ、三桮、簀
2	入手先の後継者難・人材難等	60.6%	20	簀、桁、和紙(伊勢型紙地紙)
3	入手先の技術・品質の低下	18.2%	6	和紙、いちよう板
4	材料不足等による仕入先の生産低下	15.2%	5	漉き桁、楮、いちよう板
5	代替品・輸入品等への置き換え	21.2%	7	三桮、雁皮、楮、漉き桁、トロロアオイ
6	仕入れ減少(少量調達)に伴う入手コスト増	15.2%	5	和紙(典具帖等)
7	新たな入手先の開拓が困難	30.3%	10	土佐楮、三桮、簀
8	上記以外	12.1%	4	いちよう板(加工するにも長い歳月と、特殊な技術を要する)、紗(織機が日本に数台しか存在しない。絹糸が入手困難。ロットに対応できない)
	計	100.0%	20	—

9) 問題等への対策等をとっているか

問題になっている事等について、「対策等をとっている」のは50.0%に達し、該当品目として雁皮、トロロアオイ、楮、三桮といった和紙原料のほか、いちよう板、紗、漉き桁、竹簀といった用具が挙げられている。対策の中身は「農家との連携」、「原木の確保」、「後継者の育成」など組織的に多様な取組に取り組んでいる様子が窺える。

表 109 問題等への対策等をとっているか

		構成比	回答数	該当の主な品目	対策
1	対策等をとっている	50.0%	16	雁皮 トロロアオイ いちょう板 紗 漉き桁 竹簀 石州楮 三極	<ul style="list-style-type: none"> ・(雁皮)新たな収穫担い手の発掘。自家栽培。 ・(トロロアオイ)生産地の農家との連携 ・(いちょう板)国の助成により原木の確保に努めている。 ・(紗)福井で唯一紗織りができるメーカーに生産依頼中。ただし今回が最後になる。 ・(漉き桁)若手職人を育成するために、なるべく毎年桁の注文をしている。 ・(竹簀)越前の産地でも後継者を育成している。 ・(石州楮)楮栽培の奨励。行政の後押しで新規の農家を育成している。 ・(三極)輸入に切り替え中。 ・(高知産三極)3年前から自家栽培を始めた。
2	対策等はとれていない	50.0%	16	—	—
	計	100.0%	32	—	—

文化庁 平成 29 年度伝統工芸用具・原材料に関する調査業務 報告書

<事業主体>

文化庁 文化財部伝統文化課

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3 丁目 2 番 2 号

TEL:03-5253-4111(代表)

<調査実施>

公益財団法人 未来工学研究所

〒135-8473 東京都江東区深川 2 丁目 6 番 11 号 富岡橋ビル 4F

TEL:03-5245-1015(代表)

リサイクル適正への表示:紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針による「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料(Aランク)のみを用いて作製しています。